
とある世界の四人の勇し y 変態たち

からすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の四人の勇し y 変態たち

【Nコード】

N8774N

【作者名】

からすけ

【あらすじ】

カーライン大陸ではるか昔から人間と魔族が争っていた。そんな中、現代から四人の勇者と言う名の変態が召喚された。彼らはこの戦争の中を生き残ることは出来るのか!? この作品は2010年12月31日ちゃんと完結しました。う、嘘じゃ(r y

変態たちのプロローグ（前書き）

どうもからすけです。

この小説は作者が自動車学校に行っていた間に突発的に書きたくなつて、暇な時間で少しずつ携帯で書いていた小説です。打ちミスとかあるかもしれませんが。

主にこの小説を構成するのは変態とカオスです。そして微妙にコメディィー。

シリアスは一切含まないつもりですのでご了承ください。

それらがダメだ、と言う人はブラウザの戻るを推奨。

とりあえず楽しんでもらえたらなと思います。

では本編をどうぞ。

変態たちのプロローグ

とある世界のお話。

カーライン大陸の三分の二を支配するのはフレム王国、ウィン王国、アーク王国、アルス王国の4つの王国から組み立てられている人間族の連合。

そして残りの三分の一、大陸の北側を支配するのは、魔王が君臨し、魔族と呼ばれる者たちが住む魔の国。

この連合と魔国、人と魔族は随分昔から争いを繰り返してきた。

個々の力は弱いが多く、集団で戦いを挑む人間。

対して魔族は個々の力は強いが数は人間ほど多くは無い。

そのおかげかどうかは分からないが、大陸各所での勝敗が付くことはあったが今のところ決着が付くことはなかった。

そして今となっては争いの原因が分からないほどにその戦争は歴史を重ねている。

今から百年ほど前、一時期魔の国が優勢で大陸を支配することも出来るのではないか、といわれたことがあった。

その時に連合に異界より現れた四人の勇者が魔族を押し返し、今の情勢まで持ってきたのである。

魔族を退けた勇者達は連合内で英雄として扱われ、今もその話は語り継がれている。

それからは百年ほどは大きく情勢が変わることは無かった。

しかしここ数年、魔族側の勢力が増してきているという噂が連合内に広がっていた。

このままでは百年前の時のように魔族の侵略があるのではないかと不安に思う人々だったが、同時に百年前のように伝説の勇者様も現れるのではないかと期待も持っていた。

そんな時期、四つの国の王達は、百年前勇者たちが現れたとされている大陸中央に位置する遺跡にて、勇者召喚の儀を行っていた。そう、召喚の儀とある通り、勇者たちは現れたのではなく、強制的に呼び出されていたのだ。

その儀式には遺跡に莫大な魔力が満ちることが必要とされ、それを使用した百年前からようやく遺跡に魔力が満ちたのがここ最近のことだった。

原理や細部が不明なところがあり、正直にいうと、人間にとってオーバーテクノロジーもいいところである。

そんな 確実性がない勇者の出現にわざわざ王たちが出向いたのは当然それなりの理由はある。

答えは簡単、他の国に出し抜かれなかったためだ。

前回現れた勇者は四人。そのことを鑑みると今回の勇者も複数人の可能性が高い。

その勇者を一つの国が複数引き込んでしまつてはその国が大きく出るのは間違いない。

王の代わりを出してもいいのだが、一人が行くと言い出すと、抜け駆けさせるかボケエツ！ と内心暴言を吐きながら他の王たちも俺も行く、なら俺も、だったら と行くことになってしまったのだ。

魔族との戦争中だというのに王達は互いを牽制するためにここに集まっているのだ。

そんなこんなで儀式が始まつてから数時間、参加者は各国の重要人物数十人。

疲労も溜まつているが、他の国の連中に舐められるわけにはいかんと、ほぼやせ我慢大会に移行しつつあつた時だった。

遺跡が振動し始め、祭壇が光を放ち始めた。

ようやく勇者が来るのか、と皆の期待が高まるかのように、祭壇が放つ光も強くなり、視界を奪つていった。

そうして光が晴れると、部屋の中央、幾何学模様のような魔法陣が描かれたところに見たことも無いような服を来た男が四人いた。

「知らない天井だ……」

煉は見知らぬ天井を上にして、テンプレを呟いた。

「畜生、先に言われた!!」

「ガツデム!!」

「俺が言おうと思っていたのにつ!!」

それと同時に他の三人、上から大輝、幸助、栄治が騒ぎ出した。

「待て待て、餅つけおまいら」

「餅をつけ……だと……」

「ぺったんぺったんつるぺつて」それ以上は言わせねえよ!?!「ち
っ
」

煉を皮切りにしてカオスを撒き散らす彼らに、その場に居た者は何を言っていたのか理解は出来なかった。

「まずは状況把握が先決だ」

「おk」

この場に現れる直前、同じ大学に通う彼らは前期が終わって長期の休みに入ったこともあり四人で遊んでいた（部屋に引きこもってゲーム大会など）。

そして誰が言い出したのが切欠か分からないが、途中から煉が『天然お姉ちゃん系』への想いを語り、大輝が『ツンデレ系幼馴染み』、幸助は『ワンコっぽい後輩』に栄治が『幼女』はどれだけ素晴らしいのか、と各々の意見を認めながらも自分の思いの丈を、三時間にも及ぶ誰もが一步も引かない大論争を行っていたのだ。

そんな限定的な世界の命運を左右するかのような大論争は、途中で彼らが光に包まれることにより強制終了したのだった。

「結論は出なかったがすばらしく充実した時間だった」

幸助の言葉に他のものがうんうんと頷く。

「んでだ、いきなり光ったと思ったたらこうなってたわけだが……」

「はい！ どう考えても異世界転移っばいです。本当にありがとう

「ごぞいます」

「ということは、だ」

「俺が、いや」

『俺たちが、主人公だ!!』

そう叫んだ四人の勇者は「ひゃっほーい！」とか「来た！俺の時代が来た！」とか「これでエターナルでフォースなブリザードと出来たりするんですか!？」とか「YESロリータNOタッチ!」などと叫んでいた。

そんな不審者丸出しの四人に、我を失っていた一人の王が声をかけた。

「そなたたちが勇者か？」

「……恐らくは」

煉は騒いでいたのが打って変わって、言葉を選ぶように王と会話を
する。

「そなたたちを呼び出したのは言うまでもない！ 魔族共を打ち滅
ぼしてもらったためだ」

協力してくれるな？ という王の言葉とともに後方に控えていた騎士達の雰囲気変わる。

拒否など許さないとでも言うかのような空気。

「「「「
……………「「「「

しかし、彼らはそんな空気を気にするようなことも無く、辺りを見回したかと思うと一人は膝を付き、崩れ落ちた。他にはムンクの叫びの如く絶望的な顔になっているものも居れば真っ白に燃え尽きようとしていたり、祭壇にもたれ掛かり虚ろな目でアハハと薄く笑っていたりしている。

「どっして……」

ぶるぶると震えながら崩れ落ちていた煉がポツリと声を漏らした。

「んっ」

その場に居た者は良く聞き取れなかったことで耳に神経を集中させた。数秒後にはそれを後悔するは目になるのだが。

「どつして……！」

それは魂の慟哭。またの名をただの欲望とも言つ。

憧れのシチュエーション。これもただの妄想とも言つ。

それらは一定のところまで条件が満たされていたのだが、最後の重要なパーツが彼らには足りなかったのだ。

「どつして美少女のお出迎えが無いんだよおおおおおおおおお
おおおおお！！」

そう、この場に居るのはそのほとんどが男だ。王達は言わずもがな、それを護衛する騎士たちも男だ。僅かに女性もいることにはいるが、彼らの条件を満たすほどではないのだ。

だから彼らは絶望した。

そしてこつも思つた。

ここまできて何でやねん。なんで一番重要な、寧ろ十割がたを締める美少女が存在しない？ 別にお姫様じゃなくても良かった。凜々しい騎士でもいい。可愛らしい村娘みたいのもいい。しかし、それすらも存在しないのだ。

騎士に居る女性たちも美しくないわけではない。寧ろ綺麗どころ

も何人が居る。しかし、それはあくまで現実的な話である。諦めが付いていた元の世界で年齢〓彼女居ない歴な彼らには、正直元の世界とあまり変わらない感じに絶望したのだ。

「貴様等っ、王の言葉だぞ！ 聞いているのか!？」

騎士の一人が声を荒げる。

その声に反応してか、一応現実に戻ってきた彼らはあまりの理不尽さに憤慨した。

「あゝあゝ!？ いきなり呼び出されて戦えだあ？ざけてんじゃねえよ!？ こちとらお前らみたいなおツサンあゝんど池面どもに用なんざねえんだよ!!！」

「な!？」

いきなりの暴言。

今まで言われたこともないような余りもの言葉に、王たちは言葉を失った。

「アハハ、なに？ BXD撲滅委員会に所属する僕らへの当て付けかな、かな？」

「どうしてこうなった！ どうしてこうなった！」

「リア充死ね！ 氏ねじゃなくて死ね！」

続けて他の勇者も騒ぎ立てる。

ちなみにBXD撲滅委員会とは、『バレンタイン&mp・ケリスマスデイ撲滅委員会』の略称で、日本全国に数多もの同士からなる組織なのだ。

更についでに言うところでのリア充とはイケメンの騎士たちのことである。

閑話休題。

Q・王たちに暴言を吐いたらどうなる？

A・極刑に決まってるだろjk

「……」

王の一人が顔を俯かせてぶるぶると震えながら声を漏らした。

「コケコッコ？」

「コンセントレーションじゃね？」

「いやいや、そこはむしろ」

「この無礼者共を捕らえよっ！！」

王の怒りはまさに噴火。口から唾を飛ばしながら怒鳴る姿はまさしくそれだった。

王の命令を受けた騎士たちが煉たちを、ネズミー匹通さないかのように包囲する。

「さて、どじすんよ？」

この状況に、流石の彼らも不味いと思ったのか、冷や汗を流す。

元の世界で只の日本の一般市民な彼らは、当然戦うすべなど知らない。

王の号令のもと、騎士たちが彼らに迫る。

「ふっ、問題はない」

しかし、余裕を持っているのが一人。

「来い！ カブトゼクター！！」

『なん……だと……！！』

瞬間、彼らに迫る騎士たちに、カブトムシの形を模した機械カブトゼクターがぶつかり、弾き飛ばす。

騎士たちが立ち上がる頃には、カブトゼクターは呼び出した栄治の手に収まっていた。

「変……身……！」

ベルトにカブトゼクターを装着。

次の瞬間には勇者の姿は仮面ライダーカブト・ライダーフォームの姿に変わっていた。

そしてもう一度剣を振りかざし突っ込んでくる騎士たち。

彼らを気にすることなく栄治は天に人差し指を向けて言った。

「通りすぎりのお婆ちゃんが言っていた……」

赤の他人じゃん！ というツッコミが入ったが、それを軽くスルーして彼は続ける。

「お前、僕に釣られてみる？ 答えは聞いてない!!」

じゃあ言うなよ……とか色々混ぜすぎなんだよバーローとか言う
声が聞こえたが、きつと幻聴だろう。

カブトに騎士たちの剣が迫る。

「クロツクアップ」

『クロツクアップ』

腰のボタンを押すと電子音が高速の世界に入ること告げた。

そして次の瞬間には、カブトに迫る騎士たちは弾き飛ばされた。

『クロツクオーバー』

電子音が高速の世界の終わりを告げる。

なにが起こったか解らないまま騎士たちが立ち上がるつもりだが、
ダメージが大きいのか立ち上がることは出来なかった。

「な、何をした!」

狼狽えた王から震えた言葉が発せられる。

「ただ、殴って蹴っただけだ」

聞いたのはそういうことではないだろうが、間違っではない。
本当に殴って蹴っただけだった。

「いやいや、カブトとかクロックアップとか、お前……いつの間にかそんなことができるようになったんだ？」

「……願ったら出来た（訳：妄想が現実になりますた）」

『な、なあーんだってえー！？』

そんなバカなやり取りをしていると、他の王の騎士たちが彼らを
取り囲んだ。

「これはこれで面倒だな」

「こんなときこそその技……！」

幸助が前に出ると、頭を少し下げ両手を頭の前で広げる。

「太陽拳!」

ペカーと目映く光が遺跡内を照らし、騎士たちの目を焼く。

「よっしゃ、今のうち」

この大きな隙に逃げ出そうと幸助が動こうとしたときだった。

「うおっ、眩しっ」

「たかがメインカメラがやられただけだ!」

「目がっ、目がああああっ!!!!」

他の勇者にも効いていた。

「だ、ダメだこいつら……早くなんとかしないと……」

カブトの格好で某大佐の真似をしているのは、酷いものだった。

「「うーん、このノリのよさはいいが、遊んでないでさっさと逃げようか」

『アイアイサー』

さっきまで某天空の城に出てくる大佐の真似をしてふざけてたとは思えない栄治の言葉に返ってくるのは、気の抜けた返答。

しかし、その後の行動は迅速なものだった。

「かめはめ波ー！」

幸助が両手から打ち出した極太の光線が、遺跡の壁を破壊、大きな穴を開けた。

「ヒヤッハー！ 逃げ道確保お！」

無駄にハイテンションな幸助に、他の皆が素晴らしい笑顔でGJ！と親指をたてている。

「そろそろ、逃げんぞー！」

「逃げるんじゃないです、後ろに前進してるだけですー」

「に、逃がすな！」

ようやく視力が回復してきた王たちその他もろもろ。

しかし時既に遅く、勇者たちは遺跡に開けた穴から脱出するところだった。

『あゝばよ、とっつあゝん』

と、どごごの泥棒のような言葉を残して。

空は茜色に染まり、青い鳥が編隊を組んで夕日に向かって飛んでいく。

素晴らしい景色なのだが、彼らにそれを楽しんでいる余裕は「幸せの青い鳥発見！」「捕獲！捕獲です！」などとバカをやっていたため余りなかった。

「さて、無事脱出出来たわけだが……これからどうする？」

「先程の続きで青い鳥補完……ではなく、捕獲計画を続行でどうだ

「？」

「却下だ。リアルモンハンは今度準備してからでいい」

誰が想像しただろうか。

捕獲対象だと思って近づいてみたら10メートルを超える大きさで、群れを成して口から火の玉を吐いてきたりすることを。

「まずは現状分かっていることをまとめようじゃないか」

「おk」

「ひとつ、ここは異世界である」

「ふたつ、俺たちは勇者として召喚されて拒否った」

「みつっつ、元の世界への帰りがたは分からない」

「よーっつ、誰が桃太郎侍しろって言った!」

どこから持ち出したのか分からないが、どこぞの時代劇の桃の名を連想させる着物を羽織ってわーわーきゃーきゃーと蜘蛛の子を散らすように逃げ出すボケ三人、上から幸助、大輝、栄治。それを追いかけるのはツッコミ率の高い煉。

収集が着いたのは数秒後のことだった。

「さて、このままでは重大な問題がある」

栄治が頭にタンコブを作って真面目そうにしても間抜けにしか見えなかった。

「……………なんだよ？」

大輝も頭にタンコブを作り、なに気まずそうに訪ねる。

「お前も分かっているだろう。現実逃避をするんじゃない」

「うっ……………俺だって分かっているよ……………このまま帰れなかったら、もう……………」

『……………』

皆の間に沈黙が訪れた。

それは元の世界に残した大切なもの。

「チクシヨー！　せめて、せめてパソコンだけでも持ってこれたら……………」

「もう、嫁たちには会えないのかな？」

「オワタ、俺の人生オワタ」

「もう、萌え成分とか燃え成分とかに触れる機会がないとか……」

皆が沈んでいく。

まるで真っ暗闇の中に突き落とされたのかのように。

「いや」

だがしかし、暗闇があるということは光もある。煉は立ち上がった。

「俺は諦めん！ 諦めんぞ！！」

『！！！』

暗闇に囚われていた彼らに光が差す。

「たとえ何年、いや何十年掛かるうとも俺は、元の世界に帰って嫁たちに会うんだ！！」

「そつだ……！ まだ帰れないと決まつたわけじゃない！」

「来ることができるのなら帰ることもできるはず……！」

「俺たちならばできる！ なぜなら」

『主人公だからだ……！』

そつして彼らの旅は始まつた。

変態たちのプロローグ（後書き）

これは前編と後編で構成される予定です。

後編は既に半分ほど出来ているので仕上がるのは明日にでも出来そうなのですが、今日から3、4日ほどネット環境が無いところで寝泊りするので更新は木曜日か金曜日になると思います。

誤字脱字などありましたらご報告お願いします。その次いでに感想なども軽い一言だけでもいいので一緒にくれたら嬉しいです。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

変態たちの第一話（前書き）

まず最初に、すみませんでした。

予告してたより、少し所が大幅に投稿が遅れたことをまずはお詫びします。

ついでに言えば、最初は前後編にしようかなと思っていたのですが、書いていてどんどん書きたいことが出てくるわで、もう少し多くなりそうですので、前編はプロローグでよかったですんじゃないか？と結論に至ったので少々変更させていただきました。と言っわけで、これからは小分けにして投稿していきたいと思いません。

ここからはこの小説を読む上での注意書き。

今回からは更にカオスになっていると友人から言われました。

という事で色々ネタが出て来ますので苦手な人はご注意を。

変態たちの第一話

召喚されてから一ヶ月ほど。

右も左も分からない異世界で最初にしたことは情報収集だった。

勇者補正のおかげか、言葉は日本語で通じたのだが文字の方は解読が出来なかった。というより国民の間に文字が広まっていなかったのだ。ないものは読めなかった。

とりあえず言葉が伝わると分かると、無駄にハイテンションなコミュニケーションを駆使してこの世界について情報を集めていった。

「人間と魔族の間で戦争とか、もうね」

「今居る位置は戦線から離れてるからかもしれませんが、酷いところに行ったらどうなってることやら」

煉と幸助は連合にある比較的大きい街にある食堂でお茶を飲んでいた。

数時間前にピークを終えた食堂内には煉と栄治二人しかおらず、のんびりと集めた情報の交換を行っている。

「それにしても、大輝と栄治はどうした？」

「あいつ等　てか栄治の方だけど。フレム王国の城の中に元の世界に返る方法が無いか探してる」

捕まったか？　と煉と幸助は無さそうでありそうなことを考える。

逃げ出した時から、連合の追撃は激しいものだった。

そのたびに巨大な落とし穴に引っかけたり、「残念、質量を持った残像だ」とか言って追手に偽物を追わせたりしていたのだ。

幸いだっただのは、勇者補正か何か知らないが身体能力がかなり上がっていたことだろう。

おかげで簡単に逃れることが出来たのだ。

「今まで逃げてこれたのにここで二人脱落か……」

「冥福を祈ろう、アーム」

「勝手に殺してんじゃねーよ」

ボゴリ、と煉と幸助の頭がはたかれる。

「ああ、川の向こうに嫁たちが見える……」

「おのれロリコンめ、化けてでやがったか」

「誰が死ぬか。後ロリコン言うならお前らもだろっが」

「少女は保護すべき存在なんです！偉い人にはそれが分からんのです！！！」

上から幸助、煉、栄治、大輝の発言である。

相も変わらずの変態っぷりにそれぞれの無事を確かめる。

「さて、全員集まったことだし、収穫を言おうか」

煉の言葉に全員がゲンドウポーズでうむ、と頷く。

「まずは

中略

つてところだな」

「今、とてつもなくキングダムゾン！って言いたくなっただが」

「奇遇だな、俺もだ」

「同意」

「気にしたら負けだ。さっさと進めよう」

『了解』

煉がため息をついて口を開いた。

「結論は、帰る方法は無い……か」

栄治がああ、と頷く。

「それらしき本もなければ王たちも知らなかったからな」

はあ、と栄治がため息をついた。

ちなみに、王に聞き出した方法は大輝が万華鏡車輪眼を使用した
そうです。もちろん精神崩壊しない程度。

「これからどうする？」

『……………』

幸助の問いに、皆黙り込む。

「……一つ気になることがあるんだが」

煉が迷っているかのように遠慮がちに言った。

「何だ？」

「百年ぐらい前に来たらしい前回の勇者のことなんだけどさ、その話どこまで知ってる？」

「んん？ 確か、魔族を撃退したって話だっけ？」

それがどうかしたのか？ と幸助が首をかしげる。

「その先代勇者様なんだけど、どうして撃退したところで終わってるんだと思う？」

「はい？」

「どうしてってねえ……」

「そりゃ……何でだ？」

今度は皆が首をかしげた。

「流れに乗っていたのにいきなり消息をたった勇者たち。不自然に思わない？」

勇者の話が途中で途切れていること」

「そりゃそうだな」

「俺の憶測だけど、いなくなった勇者たちは、帰る方法を見つけたんじゃないかな？」

「……なるほど」

「確かに勇者の話は途中で切れてるような気がするな」

「てことは帰る方法があるかもしれないのか」

あくまで可能性はゼロではないと言っ話しなのだが、ようやく少しだけ見えた希望。そのせいか煉たちも明るく（暴走）なってくる。

「ようしゃー！これでようやく嫁たちに会える！」

「見逃してたアニメとか見んと」

「ああ、ようやく積み立ててる美少女ゲームを消化できる」

「気が早いぞおまいら。確定じゃないんだからな？」

そんなことを言う煉の顔も、明るいものになっている。

「んで、その帰る方法ってのはどこにあるか検討ついてるんか？」

急かすような大輝に、当たり前だのクラッカー、と煉は不適な笑み（笑）を浮かべた。

「恐らく、魔国だ」

「ヨッシャー！待つとれ魔国！！」

「今すぐ行くこうしよう！！」

「ヒヤッハー！たまんねえ、凸撃（誤字にあらず）だあ！！」

無駄にハイテンションであるが、これは仕方の無いことだ。

1ヶ月も彼らは生命活動に必要な成分（萌えや燃え成分等）を撰取出来なかったのだ。

今後の方針が決まった彼らの行動は迅速だった。

城から盗んだ（貰った）地図を広げ、行く先に掛かる日数を決めると、今度は食料調達（ちゃんと店で買いました）するまでにかかった時間は半日もかからなかった。

そこからは強行軍。

勇者補正なのかなんなのか、馬より早く走れて持久力のある煉たち。

途中に襲ってきた山賊をNANOHA式OHANASHIをしたら何故か兄貴たちと呼ばれたり、夜営をしているときには魔物が近づいて来たが、幸助が金髪になって身体から炎みたいなのを出すと一目散に逃げていった。

その他、途中で山賊や魔物に襲われていた村とか町を助けたりして「勇者様」やらなんやら呼ばれていた気もするが、足を止めることなく行軍し続けてから二日後。

「なんか色々あったが、ようやくここまで来たな」

暗雲立ち込める丘の上、栄治は魔国を眺めていた。

その姿は見るものがいれば勇者のようだ、と言うものもいるかもしれない。

ただし、頭からカレーの様なものがかかっていたらである。頭にカレーのルーとニンジンに乗せて格好をつけても間抜けなだけだ。

「食材を無駄にしたやつが格好つけてんじゃねえ！」

「お前が作ったのはカレーじゃねえ！（閲覧削除）だっ！！」

「あはは、夜空で嫁たちが手をふってる」

一名ほど壊れているものがあるが、栄治が作った（閲覧削除）はそれほどのモノなのだ。

幸助という名前に反して幸運が訪れないやつである。

そんな風に彼らが野営の準備をしていると、突然地響きが起きた。

いきなりの出来事に慌てた煉たちだったが、瞬時に不穏な気配を感じ取ると警戒態勢をとった。

「来るぞ！」

気配が自分たちの足下、地面の下から感じ取れると蓮が警戒を、栄治が「散開いっ」と叫んだ。

彼らがそれぞれ飛び引くと、先ほどまで居た地面が隆起し、その中からボゴツツと勢い良く飛び出したのはミミズと蛇をあわせたような巨大な魔物だった。

「チエストオオオオツ！」

瞬間、蛇が苦手な大輝は螺旋丸で吹っ飛ばした。

「っ！？ 上だあっ！！」

幸助の言葉に何事か、と皆が上を見上げると目に映ったのは、黒い何か流星のように自分たちに向かって降り注ぐ光景だった。

変態たちの第一話（後書き）

プロローグからすでにカオスだったぜ、と友人に言われたときは「ですよ〜」と自分でも思っていたからすけです。

いやですね、友人から貰った評価が「これはひどいw」「なんてカオス？」と言われたときは狂喜乱舞ものでした。
一応それを目指して書いたわけですから。

そして気付いたのは未だにヒロインのヒの二画も出てないところ。
タグにロリっことつけてるはずなのに……

大丈夫。大きいお友達は次からに期待大……かも。

タグで思い出したのは、変態に紳士を付け忘れるという最低の失態を犯してしまったので、全国の紳士諸君にお詫び申し上げます。

では、次こそは素早い更新を目指しますのでよろしくお願いします。

変態たちの第二話（前書き）

前回の分、ラストのほうだけちょこっと修正しました。

注意！！

今回は非常に登場人物たちが暴走しております。

小さいおにゃのこには興味がないぜ！ やっぱ熟女だろ！

てな方は読まないほうがよろしいかもしれません。

合言葉は『YES・ロリータNO・タッチ』

変態たちの第二話

「っ！？ 上だあっ！！」

幸助の言葉に何事か、と皆が上を見上げると、上から直径数メートルはある数十体のダンゴムシのような昆虫が丸まって降ってくる場所だった。それはまるで夜を切り裂く流星群のようで

「なんてメテオスコール!？」

幸助から思わず出てきたデジタルな世界の成熟した喋る星型のモンスターの技名に「懐かしいな!？」と煉が反応する。

「って、遊んでる余裕は……あるな」

煉の言葉通り、それぞれの能力を発動して、栄治たちはダンゴムシ流星群を迎え撃っていた。

栄治は変身してキックで蹴り返しており、幸助も気を高めて殴り飛ばしていたり、大輝もなにやら風遁の術を使っている。今では誰が一番遠くに飛ばすか競っているぐらいだ。

そんな余裕な友人たちを見て、煉は心配するだけ無駄だったこと

にため息をつくど、だったら俺もやらしてもらおうじゃないか、と言つとどこからかギターを取り出した。

「うおおお！俺の歌を聞けえ！！」

「巨人の星よろしく！」

「古いよ!?!」

思わず出てきた昭和のアニソンだが、球をかつ飛ばしている今の光景を見ると、あながち間違っていないのかもしれないという結論に至り、「真っ赤に燃える」と歌い出した。

煉が歌い出したと同時に、栄治たちの身体から湯気のようなオーラが溢れ出す。効果は歌（または曲）を聞かせることによる精神高揚。

ぶっちゃけ曲の内容がわかるのは彼らだけなので、専用の精神高揚剤と言ったところだろうか。

「み・な・ぎつ・て・き・た!!」

「ヒャッハー！最高にハイってやつだぜえ!!」

「秘技・一徹流ちゃあぶ台返し!!」

大輝がもはや伝説になつていいるちやぶ台返しで巨大ダンゴムシを蹴散らしている光景は、それはそれは素晴らしいものだった。

「ふう、こんなもんかな？」

煉の曲が終わると同じぐらいに大輝がいい仕事をした、と言わんばかりの素晴らしい笑顔で出てもない汗を拭った。もはや忍術の影も形もない。

「っ！そこだあ！！」

突然、栄治がクナイガンを森に向け、十数メートルほど先にある巨木を撃った。

「きゃあっ！」

その狙いは正確だったようで、着弾すると子供のような甲高い声が響いた。

何事かと注視すると、数十メートルはある巨木から落下するのは金髪ツインテのよう、よ。

思わず視力が2.0以上になった彼らは、落下中のよう、よの泣き顔を脳裏に焼き付けた。この間なんとコンマ0.1秒

その間も落下していくよう、よ。

そして全員が駆け出した。

何故か？

決まっている。彼らは変体と言う名の紳士。故によう、よは無条件で保護する存在なのだ。

例えそれが、先ほど奇襲を仕掛けてきた者だったとしてもだ。

「あのよう、よは俺が助kノワア!？」

「はっ、甘いnブベラ!？」

「ところがギツチョン!!」

走りながら我先にと相手を妨害しては自分も妨害されながら進んでいく様は鬼気迫るものがあった。

「ハイパークロックアップ!」

『ハイパークロックアップ』

「『せけえ!?!』」

皆が気付いた時には、栄治が居るのは彼らの隣ではなくよ
よの落下地点。

落下してくるよう、よをしつかりと受け止めた栄治は、落下の
恐ろしさからかいまだ抱き止められたことに気付かずに、体を強ば
らせて目をつむっているよう、よの顔を視姦する。

まだあどけなさが残る顔立ち。ギュツと閉じられた目は、見る者の
保護欲を刺激する。

「ふえ？」

いつまで待っても訪れない地面との接触に、金髪ツインテのよう
よは恐る恐ると目を開いた。

「大丈夫ですか？ロリ神様　ではなくプリンセス」

「へ？」

瞬間、呆けるよう、よ。

無理もないだろう。意を決して目を開けると、そこにいたのは訳の
分からない虫の形を模したフルフェイスヘルメット。その相手は、
彼女にとって倒すべき敵なのだ。

そんな相手に助けられて抱きかかえられていたらこんな反応になるのも無理は無い。

ついでに言えば、周りで「フラグが、フラグがあああ……」などと膝を付いて嘆いている他の三人の勇者が無様な姿をさらけ出している。こんな状況下で平然としている者が居れば、そいつも同類か、又はこの世の出来事を全てスルーできる類稀なるスキルを持っているのだろうか。

「な、なんで私を……」

助けられたということに納得がいかないのか、よう、よは困惑した様子で栄治に問いかけた。

「助けるのに理由が要るのか？」

「!?!」

その一言を聞いて、よう、よは驚愕の表情を浮かべた。

なぜならこの世界で敵と言うものは、倒すべきものであり決して助けるものではないのだ。

しかし、彼らはこの世界の常識では縛られない。それ以前に、彼らは紳士と言う名の変態だ。

彼女を助けるのに理由なんて無粋なものはないのだ。

「だ、だってあなた達は私たちを滅ぼすって……」

その一言を言ったことに、彼女は一瞬で後悔した。

「クオアアアアアアツ！ 誰だっ！？ あらん噂を流しやがった
ボオケナス共はあああっ！！」

「そのせいでロリ神様を危険に晒しちまったあああああっ！！
？」

「勇者か！？ 勇者の肩書きかああああ！？」

「ひううっ！？ ゴ、ゴメンなさいっ！？」

「落ち着かんかつ、貴様らあ！！」

『！……』

栄治の一喝に、その場に居た者は動きを止めた。

「ようじ」 ゲフンゲフン、プリンセスが怖がっておられる。もう
少し落ち着け」

「そ、そうだ……」

「俺達はなんて過ちを……」

「後はどうすればいいか、わかってるよな？」

「」「」「すいませんでしたあっ！」「」「」

一斉に土下座する三人。《羞恥心くよう、よ》の方程式が正しいことが証明されたのだ。

「……え？ え？ え？」

戸惑うよう、よ。彼女の反応は決して間違っではない。

「さあ、お互いの交流を図るためにも、OHAN お話をしよう
じゃありませんか」

変態たちの第二話（後書き）

うん、言われそうなことは分かっている。

友人にも「書きすぎだww」「バロスww」とか言われてたしね。

よう、よに興味のない方はもう少しだけまってくださいね。

では、次回も早めの更新を目指して。

変態たちの第三話

まず行われたのは、「このお方を野宿させていいのか!？」と星が煌く夜空を見上げて言った栄治の一言が原因で、寝床作りと言う名の家作りとなった。

凄まじい勢いで煉が設計図を描き、他の者は建築に最低限必要な木を伐採していく。

止まることを知らない流れる作業に、よう、よはただ呆然としているしかなかった。そんな彼女は後に語った。建築とかとかそんなちやちなもんじゃなかったのです、もっと恐ろしいものの片鱗を味わいました、と。

そして数分後に出来た立派な二階建てログハウスで、まずは腹が減っては何もできんと幸助手作りの夕食を食べながらの自己紹介が始まった。

分かったのはロリ神様の名前がフィオナということで、なにやら魔国のお姫様らしい。

俺らは召喚される国を間違えたな、と四人は嘆いた。

そしてさつき襲ってきた巨大な虫はフィオナの使役する昆虫でらしく、幸助がなにやら「フィオナちゃんのなら我慢せねばならんが……」などと悩んでいたがどうでもいいことだった。

更に詳しく聞くと姉たちがいるそうで、フィオナは末っ子の四女だとの事。

普段から子ども扱いされており、自分も大人になったのだと証明したかったらしく、100年前のように勇者が侵攻してきたとの知らせを受けて何かしたら認めてもらえるだろうと飛び出てきたとの事。

本当に可愛らしいことである。

思わず父親が見るような視線がフィオナに集中するが、どうでもいいことだろう。

そんな楽しい食事の時間も終わりを迎え、お風呂に入って今日は寝ようとする、コンコンとログハウスの戸を叩く音。

知らない土地、更には魔国側には敵と認識されているのに特に不審に思うことなく、じゃんけんにかけて明日の朝飯の下ごしらえをしていた煉は対応した。

「はいはい、どちら様です」

そこにいたのはまるで天使だった、と後に煉は語っている。

ほんわかとした雰囲気、包み込むような母性を感じされる垂れ目の女性。

「あの、フィオナちゃんがお邪魔してませんか？」

「はい？」

長女・フィリアの登場であった。

「どござ、つまらないものですが……」

「ありがとうございます。あら、おいしい」

少々お待ちくださいと言ってフィリアがソファーに座ったのを確認するや否や、ものの数秒でお茶菓子を用意した煉は、足音を立てることなくフィオナのいるであろう部屋に向かった。

「おっじゃまっしまっすっ！」

「栄治」と札が掛けられている部屋の戸を蹴破る。

中から「ひゃああああっ!？」と思わず録音したくなるような声が聞こえたが、ここはぐっところえてフィオナに「お姉さまが来るよ」と言っ。

煉が何を言ったのか理解できなかったのだろう。フィオナは一瞬固まると、「ええ〜〜!」と声を上げるとあわてた様子で部屋の外に出ていく。

「栄治？」

煉が栄治に確認の視線を送る。

「わかっている」

さも当然とばかりに栄治もうなずいた。

そして同時につぶやく。

『YES・ロリータ、NO・タッチ』

彼らは紳士、ただ愛でるだけ。それだけで十分なのだ。

そんなこんなで四人が合流し、リビングに向かうとそこに居たのはすずめの涙張りの抵抗をするフィオナを膝の上に乗せてご満悦の表情で愛でているフィリアの姿。

この世界に来て始めてよかったと彼らが本気で涙を流した瞬間だった。

残念ながらこの場に「なに、このカオスな空間？」と言ってくれる人はいない。

話でもしましうか、と煉が人数分のお茶菓子を用意する。

「うん、美味しいお茶とお菓子ね。彼方が？」

とフィリアが煉に尋ねる。

「ええ、よかつたらお持ちしますけど？」

美味しいといわれたのが嬉しかったのだろう。笑顔を浮かべた煉が、追加のお菓子を盛った皿を既に手に持っている。

いただくわ、との返答に皿が追加された。

一人のよう、よはこれ以上食べたなら太る、と遠慮がちになっていたが姉が口元まで持つていくと誘惑に負けたのか、小さい口を一瞬懸命に動かして食べる。

その姿を四人＋姉はしっかりと永久保存版で脳内に記録した。

そんなこんなで話してわかったことは、フィリアは見た目通りおっとりした性格の持ち主らしい。

それから行われた話し合いは日付が変わるうか、といったところまで行われた。

お互いの状況など、まだまだ話し足りない（主に四姉妹について）
感はあるのだが、煉が真っ先に「夜更かしは美容の天敵ですよ」
とフィリアとフィオナを二階の寝室へと案内する。

「それでは、おやすみなさい」

「はい、ありがとう」

一つのベッドへ腰掛ける美少女と美よう、よの姿を尻目に、煉
はそっと扉を閉めた。

扉を閉めるとき中から「さあ、一緒に寝ましょうか」とか「ひ、
一人で寝れます」や「お姉ちゃんのこと嫌いになったの……？」な
どということは聞こえなかったのだ。ついつい頭の中で嫌々ながら
も姉と一緒に寝ている妹の姿なんかは想像なんてしたことは無かつ
た。

まるでなにか煩惱でも振り払うかのように、ええい……！ と頭
を振るったりしてた煉が居たが、その姿を見た者は誰も居なかつた
という。

変態たちの第三話（後書き）

色々と説明が足りてないところがあると思いますが、それについては次回に。

ここまで読んでいただいております。ありがとうございます。

誤字脱字などありましたらご報告ください。感謝感激雨霞、狂喜乱舞します。

では、次回は早めの更新を目指して。

変態たちの第四話

姉妹を部屋に送り届けた煉が戻ってくると、すぐさま情報整理に取り掛かった。

「意外だな。俺たちが敵視されてなかったとは」

「まあ、味方としても見られてないんだろっけど」

実は煉たち四人組は、魔国からはあまり敵視されてなかった。というよりなるべく接触すると言われてたらしい。

おまけに、この場に来るまでに魔物に襲撃されていた村を助けたのだが、どうやらそこは魔国側の村だったとのこと。そのことが少なくとも煉たちの評価にプラスされたことは間違いないだろう。

「万が一、超が一にでも、どうしても仕方なく回避できないようなら、少なくとも友好的な態度は取っておけよということしつこく言っていたお父様は珍しく印象的だった」

と王である父に言われたフィリアは珍しいこともあるもんだ、とその時は思ったらしい。

なら何故フィオナは仕掛けてきたのか？

簡単だ。王が話をする前、情報だけを聞いての行動だったと。勘違いや早とちりとも言つ。

そのおかげで総動員するほどの大搜索が行われかけようとしたのだが、そんなことなら自分たちが探したほうが早いとのこと、大搜索が行われる前に護衛をつける時間も惜しいとばかりに姉妹が探し始めたのだ。本当に良い家族愛である。

そうしてフィリアがフィオナの魔力の波長（個人によって差があるらしい）を感じ取り、このログハウスを訪ねたのが昨日の夜だ。

「ということは、だ。勇者について魔国側は何か知ってるな？ といつても極一部だけだろうが」

栄治の予想に煉も頷く。

「魔王直々に勇者には関わるな、か」

これは怪しい。怪しいにおいがプンプンするではないか、と煉がどごその新世界の神になろうとした男のごとく悪い笑みを浮かべる。

「最後は心臓麻痺で死ぬんですね、わかります」

「死にたくない！ 死にたくない！！」

「ハッ、バロス」

「鼻で笑われたっ！？」

「なんとという鬼畜、まさに外道……！！」

話が進まないということと今日はお開き。「あらやだ、寝不足はお肌の天敵よ」と誰かがふざけた事を言ったやつを、気持ち悪いと実際に切り捨ててそれぞれの部屋に戻っていった。

切り捨てられて放置されていた幸薄いと評判の青年は後に語った。

「放置プレイ……悔しい、でも感じちゃ」

リビングでひっそり、ビクンビクンしていたそうなの。

そして翌日。

煉は皆より一時間以上早く早起きして朝食を作った結果、フィリアのお気に入りとなった。

何故かフィオナに懐かれている栄治以外は「なぜだああああ！？」

などと嘆いていたが、煉は余裕を持ってスルーしていた。

昨日のお菓子も含めフィリア曰く、ここまで美味しい物を食べたのは初めてとの事。

一人アパートで自炊していたことに心底感謝した煉だった。

「それでは行きましょうか」

フィリアの言葉に四女を除いた全員が「イエス・ユア・ハインス！！」と一糸乱れぬ動きで整列する。

「それじゃあ、呼ぶね。チーちゃん出てきて！」

足下にオレンジ色に光り輝く魔方陣を展開し、フィオナが元気良く叫ぶ。

その魔方陣から、ズルズルと音を立てて出て来たのは直径五メートル、全長数十メートルは最低でもありそうな巨大な蛇。

フィオナが呼び出したこの蛇、名前は無いなんてことはなくチーちゃんという。

チーちゃんに乗っていけばこの場所から城がある王都までは急いでいけば一日ほどで着くとのこと、ここからの移動はチーちゃんに乗っていくことになるので出てきてもらったのだ。

「 ツ！！！？」

約一名、大樹と言う名の人物がものけの姫さんのアニメに出てきそうなサルの如く「こおのお世おのお終わりいだあああ！」とばかりに顔面蒼白になっている。逃げ出さないだけでも褒めるべきなのかもしれないが、他の面々（呼び出したフィオナは勿論、フィリアも）がチーちゃんに乗り込んでいく中、蛇、というより爬虫類が苦手な大輝は「飛雷神の術でいっちゃんだめ？」と駄目元で聞いてみたが答えは「当たり前だろjk」だった。

結論。

大輝は一人走って行くことになりました。

チーちゃんより早く走っていく大輝に対抗心が燃え出したのか、「限界突破あつ！」と言わんばかりにチーちゃんも普段以上のスピードを出した結果、日が沈む直前に魔国の王都に着いたのだった。

途中、チーちゃんの体力が切れかけてスピードが落ちたことがあったのだが、僅かにライバル心が芽生えたらしい大輝が「Never Give up!!」や「キミなら出来るっ！ 絶対できるっ！」そして最後のラストスパートでは「もっと熱くなれよおおおお！！！」とSHUNZOぽくなっていたのは気のせいだと思っただけたい。

その後、夕焼けをバツクに握手（手と尻尾の先）していた一人と一匹の姿が見られたという。

そんな光景が王都で見られたことが原因で、何故か無駄に暑苦しい魔族の男たちが増殖。互いに競い合い、高めあっていく者が増えた。そこかわりに元々低かった結婚率の更なる低下や、平均温度がいくつか上昇したという記録が残されている。後にこのことを「S H O Z O・オーバーヒート現象」と呼ばれ、後世の学者の頭を悩ませることとなった。

変態たちの第四話（後書き）

展開が遅い……

のろのろとしてますが完成までは頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

変態たちの第五話（前書き）

今回のお話は変態成分、紳士成分、おばか成分及びネタ成分など非常に少ないです。ついでに言えば文字数もいつもより少ないです

つまり作者が少しだけ真面目な話を書いていたということをご了承の上お読みください。

ただ、変態成分などは少ないだけで、入ってはいますよ？ これ重要。

では本編どうぞ。

変態たちの第五話

耳、耳、耳、耳、耳

王都に入ってから彼らの目につくのはそれである。

なぜそれらが目につくかという点

「ケモノ耳キターッ」

「あの耳、モフモフしたいです……」

「ケモノ耳の幼女、だと……ハアハア」

「ここは、桃源郷か……!？」

一部が思わず(。。(のような顔文字が具現化しそうなほどの勢いがあったがそれも仕方ないことだろう。

なぜなら眼に映るのはどこからどう見ても ケモノ耳だからである。

種類も豊富でメジャーなイヌミミにネコミミ、ウサギミミやさらにオオカミミミミにトラミミ、キツネミミがあった。マイナーなものでタヌキミミやクマミミ、ハムスターミミまでも選り取り見取り。

まさにハイテンション、ヒヤッハアー！ な状態である。

そんな状況な彼らを誰が責めることができようか。

否、誰もできない！

「フィリア様、ご無事でしたか!？」

田舎者が上京してきたかのように煉たちがきよろきよろと見回している、焦った様子の白銀の鎧を着た30台半ばほどの男が、部下と思われる数十人の魔族を引き連れてやってきた。

「ありがとうございます。大丈夫よ、ヴォーグル」

「フィオナ様も、ご無事なようで。王も心配してましたぞ」

「うっ、うっ、ごめんなさい」

「そしてそちらが……?」

「ええ。『勇者』様方よ」

ヴォーグルが視線を煉たちに向けると、珍しく煉たちがキチッと背筋を正す。

「煉といます。こちらから、栄治に大輝、幸助です。よろしくお願います」

煉に紹介され、他の三人も「よろしくお願います」と会釈してみせる。

「私は第一騎士団隊長ヴォーグルだ。あなたたちに関しては連絡は聞いている。姫様が世話になった」

外には脅威となるようなモノはほとんど居ないとはいえ魔物がうるつくことがあり、王都に入るにあたって当然のことながら外壁にある門をくぐることになる。そして姫が帰ってきたということも門番から城の方に連絡がいつてあったのだ。

「いえ、びs 当然のことでしたまでです」

思わず美少女はこの世の宝ですから！！とか言いそうになるのを必死に堪えて栄治が答えた。

相手はこちらのことなどほとんど知らないだろう。ふざけた対応、下手な言葉などを使ったらその結果、自分の首を締めかねないのだ。相手の印象を良くするのもコミュニケーションの一環だ。

「王もあなたたちに会いたいと言っておられる」

「王様、が……ですか？」

「そうだ」

「……」

王が会いたい、と言われたことに対して怪訝な表情をしたのは煉だ。と言っても他の三人も煉の気配を読み取ってか言葉を発することは無い。

「どうかしました、レンさん？」

考え込んだ煉を不思議に思っつかフィリアが声をかける。

「いえ。こんなどこの馬の骨とも知れぬ奴等と、一国の王が会いたいというのは少々疑問が……いくら娘を、姫を助けたからと言ってそこまでするものなのでしょうか？」

本人たちにその気が無いとしても、傍から見れば彼らはただの不審者だ。この世界、この国のことはまだわからないのだが、王という職業も姫を送り届けたとして礼ぐらいはあつたとしても、それだけなのではないだろうか？ 会いたいと言うのはいかななものなのだろうか？ 煉の中ではそんな考えが渦巻いていたのだ。

「この世界は元居た世界とは違う。完全にアウェーなのだ。自分たちの常識はこの世界での非常識と言うこともある。一つの判断ミスで命を落とすのはゴメンだ。だからこそ煉は警戒するし、それを分かっている他の三人も煉のやっていることに口を出さない。」

この時、「会いたいつて言ってるから会っていけばいいんじゃないの?」とフィオナが言いかけたが、空気の重さからか流石に口には出なかった。

「たしかにアナタの疑問も尤もだ」

「では?」

「うむ。それだけの理由で王は会いたいといっているわけではない。『勇者』という肩書きはアナタたちが思っている以上にこの国には特別な意味がある、ということだ」

その言葉を聞いた煉は一瞬怪訝な顔をしたが、分かりましたと頷くと、第一騎士団の一部隊に率いられて煉たちは王城へと向かった。

変態たちの第五話（後書き）

季節の変わり目で体調を崩したからすけです。

思う存分バカと罵って下さい。それは褒め言b（ry

皆さんは寝るときに窓全開とかしないように気をつけてください。

流星に今は自分も締めてます。え、遅い？

正直、今回は上記の関係で書く気力が奪われていってしまったと言
い訳してみる。

真面目な話書いてるとずっとその方向で行きそうで怖い。

あくまでこの話はネタで行きますw

さあ、このお話も折り返し地点へ。十話までには終わらせたいとこ
ろです。十いくかどうか分からないですけど。

では次回は体調を崩さずに早い更新を目指していきます。

変態たちの第六話（前書き）

この話を書くまでに一週間も掛かってしまったorz

その割にはグダグダしていて展開が遅くてほとんど進んでませんが有害です。

全てはポケモンでの孵化作業が（ry

今回は前回の真面目成分もあつてかはっちゃけました。ネタ出したかっただけでも言う。

そんなので大丈夫か？

大丈夫だ、問題ある。

とりあえず本編どうぞ。

変態たちの第六話

「門をくぐりぬけると、そこはお城でした」

「いや、そのまんまだし」

などと言って場内に入ったのは十分ほど前になるだろうか。

今現在はヴォーグルにここで待っているように言われた客室らしきところにいる。

69

「それにしても、豪勢……なのか？」

ボケくとあたりを見回す。

部屋の中にあるのは暖炉に棚、二対の白銀の鎧と目立つのはこれくらいだろうか。

「鎧ってこんなところに飾って何か意味あんのかね？ 使って何ぼだろうに」

何かの拍子で壊れたらとチキンなハートに逆らうことなく、鎧とにらめっこするくらいの距離で眺めている幸助が言った。

「相手に見せつけるためのものだろ？　　うちはこれくらいすごいんだぜー、ってな感じで」

大輝がなんもんでもいいんさー、と投げやりな感じで答えた。

「おまけに実用性はなさそうだな。観賞用だろ」

「栄治に一票」

「一票」

「あ三拍子」

「ひょう違いです」

「フヒヒ、サーセン」

あまりにも退屈なためか、だんだんとだらけてきている。

「実用性は……」

「どうかした？」

何か考え込むような幸助に煉が声をかける。

それがきっかけだったのか、待ってましたあとばかりに幸助は口を開いた。

「そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「フルボッコにされるんですね、わかります」

「アーン」

「神は言っている。ここで死ぬべきではないと」

「そして戻りすぎだと思いがタイトルに戻る、と」

「そんな装備で大丈夫か？」

「一番いいのを頼む。キリッ」

どうよ？ とばかりに出演者の煉と幸助が残りの二人を見る。

「はいはい、バロスバロス」

「エルシャダイ乙」

「見事なほど冷めた対応だった。」

「イーノツクエ……」

「ああ、今回もダメだったよ。あいつは人の話を聞かないからなあ」

「このダメだこいつ等、早く何とかしないとっ！」

「ネタがわかる俺らも俺らだけだな」

「ですよー、とどんどんグダグダになっていったところで戸をノックする音が聞こえた。」

煉が「どうぞー」と言うと、扉が開くとヴォーグルが入ってきた。

「待たせた。準備ができた、王が御待ちだ」

「それじゃあいごうか、おまいら。慎ましくな？」

「ネオさんですか」

「仮面でもつけてなさい」

「復活フラグですね、わかります」

緊張感のかけらも感じさせない四人に、ヴォーグルが少しは感心していたが、それに気づくことは無かった。

「と言うわけでやってまいりました、王様の部屋の前でございまする。ガクブルだぜっ……」

「どーしよっ どーしよっ!？」

「ハ、ハハ…… ナサケナイニ、オマイラ…… コンナコトデビビツテドウスルヲ」

「鏡見て言え」

堂々としているとはいえ、彼らは基本は自己主張の薄い一般的な日本人。しかも人前に出ての発表などは全能力を駆使して、全力で回避してきた猛者たちだ。今までは虚勢やらなんやらで無理やりテーションを上げたり落ち着いたりして何とかしてきたのだが、今回はどうにもなりそうにない予感がしたのだ。

この予感には日本国民の内、数千万人ほどが習得されているといわ

れているものの程で、煉たちもその内の習得者たちだった。

ちなみにこの予感、《チキン・センス》と呼ばれ、主に授業中など当たりたくないときに（あ、これ当たるな……）と思ったときに本当に先生に当てられたりする時に感じられるものである。

主な習得者としては、こんな問題分かるわけねーよ族や、勉強？なにそれ美味しいの？族が中でも多数習得している。当然、当てられて答えられるわけは無い。それがいじめの原因の一つとも言われ始めていないこともないかもしれないが、その多くは謎に包まれている。

要はこんな時のいやな感じは良く当たるよ！ と言うお話でした。

閑話休題。

「ヴォーグルさんっ、何かやっちゃいけないこととかあったりしませんかっ！？」

「や、やっちゃいけないこと？」

あまりもの煉の気迫に、流石のヴォーグルも引いた。

「そう、たとえば王様の前で突っ立ったままだと流石に不味いと思うんだけど、どうすればいいのかな！？」

「呼吸とかしてもいいんだよね！？」

「これ、出ないとダメなんですか!？」

「あ、ああ。方膝を付いて頭を下げていたらいい。本来なら右手を心臓の前に当てたりするんだが、これは騎士たちだけだ。お前たちなら問題ない。それと呼吸をしないとどうするつもりだ!? 出ないといけないに決まっているだろうっ!? おまえら緊張しすぎだぞ!？」

煉に続けとばかりに他の三人もまくし立てるかのように質問していく。中には見当違いの質問や、アホなこと抜かした者もいたが、律儀にもそれぞれの質問に答えて、突っ込みを入れていくヴォーグ

「そ、そうだ!」

「っ!?! どうした!?!」

そしてなにか衝撃が走ったかのように幸助が声を上げた。

「こういうとき、決まって喋るのは一人だ……リーダー的な誰かなあ!?!」

「「「!?!?!」」」

今度は全員に衝撃が走る。

ヴォーグルは我関せず、だ。適応能力が高いことはいいことである。

「い、今まで通りね」

「ジャンケンポン！！」

大輝が不吉なことを言い出す前に、その流れを断ち切らんが如く煉が代表者と言う名の生贄を大量生産してきた禁断の儀式、邪ン権を始めた。

結果は

「「「「
……………」」」」

栄治・幸助・大輝の三人は手を大きく開いた形、所謂パー！。

煉は硬く握り締めた拳がプルプルと震えている。言わずもがなグ
！。

「オワタ」

三人は極楽、一人地獄。地獄の方が四つん這いになり嘆いていたりするがどうでもいいことだ。既に生贄は決まったのである。

「フ、フハハハハハ……」

「不意打ちする方が悪いのだよ……!!」

「祝・代表就任！」

そんな事してようやく代表が決まり、王の前へと？がる扉をくぐった。

変態たちの第六話（後書き）

はい、今回は全くといいほど進んでない気がする自分もします。

これだけでも分量に時間もかけすぎですね。

全ては孵化作業が（ry

2ボックスがダンバルで埋まっちゃったぜい！ もう2ボックスもイーブイで、あと1ボックスもラルトスで埋まった。

三匹の性格一致がでるまで三日ほど掛かってしまった……orz
後悔はしていない。イーブイの 出る確率が低すぎるんです。

次回も一週間以内更新目指します。今回はギリギリだった……よね？

変態たちの第七話(前書き)

今回は『四人の変態』過去最低の文字数となっております。

ただでさえ短かったのに更に短くなってしまいましたorz

全てはポケモンの育s(ry

変態たちの第七話

「主らが今代の『勇者』か」

「はい。私が代表（という名の生贄）の煉といえます。他三名、陛下のお目にかかり、光栄です」

城の謁見の間にて、煉たち四人は片膝をつき、頭を垂れて魔王との謁見に挑んでいた。勿論一対四てな訳では無く、部屋には魔国の精鋭と思われる方々があまり目立たない色んな箇所に配置されている。

（あああああ〜）

（いかん、意識が朦朧と……）

（腹が痛くなってきたんだけど、ドウスレバイイデスカ）

（いかん、少しちびった……）

なんとか表情や声に出てはいないものの、チキンハートを持つ煉たちの内心は早くオワレかもう死にたい、のどちらかだった。

「うむ。楽しんでいいぞ」

そう言われて膝が緊張に震えながらも、内心生まれたばかりの小鹿の如く立ち上がる。

そうして目に入るのは王の風格と威圧されているかのようなオーラをかもし出している、見た目三十歳後半から四十歳前半程の厳つい顔して鋼鉄を思わせるすばらしい髭を生やした細めの男が、このお方が王ですよ　と宣言でもしていそうなほど分かりやすい椅子に座っている。

王の姿を直視して余りの緊張からか煉たちは、俺たちは飛べるんだ！　と思いつ込み「アゝイ、キャーン、フラーーーーイッ！」と言って窓を突き破りたい衝動に駆られた。

無論そんなことはしない。高さ百メートルほどから飛び降りたら地面に真っ赤な花を描くかトマトを撒き散らすことになるだけなのだ。嫁たちに会うまで、彼らにそんな選択肢は選ぶことは出来なかった。

「で、お主らの目的はなんだ？」

あまりも直球な質問に、色々と面倒そうなり取り取りでもあるのかと思っていた煉は逆に意表を突かれる形となった。

「は、はい。元いた世界への、帰還です」

短い会話でも、下手な事言ったら首が飛びかねんと戦々恐々しながらゆっくりと言葉を考えながら喋る。

「あてはあるのか？」

「いえ。人の国に情報は何も無く、僅かな可能性をかけてこちらに来た次第です」

「その僅かな可能性とはなんだ？」

「はい。前回の……『勇者』は、人の国の話では途中でぶつとりと途絶えていたので、そこになにかあるのではないかと思い」

「まじ魔国を訪れた、と言っわけか」

はい、と煉が告げると王は僅かに口の端を上げて少し身体を前に出して言った。

「我は、そのことに関しての情報は持っている」

「っ!!! ほっ、本当ですか!？」

思わず言葉が荒くなってしまったが、仕方ないことだろう。召喚されてからフィリアやフィオナとは出会ったが、やはり嫁に会えな

いというのは色々と精神的に来るものなのだ。二人と会うまでは飄々としている栄治でさえ、心の中では　タソハアハアとかなり禁断状態だったのだ。無論他のものも色々とヤヴァかった。あえて上げるなら「ブルウアアア！」とか「オオール・ハアイル・ブリイタアアニア！」とかとか「ベリイメロン！」の他に「一つを極めてこそ、必殺となるのだあ！」や「ふぐた君」などと叫んでいたのだ。勿論栄治も。

「ああ。だが、ただで教えるには、な？」

「「「「何なりとお申し付けください」「」「」

即答・即行だった。タイムラグなんて無粋なものは存在しない。今、彼らの反射神経は絶頂のピークを迎えた。

合図も何もしていないのに四人が同時に膝を付き、頭をたれたのだ。そのことに、その場に居た者は少なからず驚いた。あの王でさえもだ。

「なに、お主に手伝ってもらいたいのだよ」

「（（（手伝う？）（（（

国が手伝いを欲している事柄に対して、果たして役に立つようなことが出来るのか？　とここでも四人の気持ちが一つになった。

「なに、ただの魔王討伐だ」

「「「」」

はっ？「「「」」

数十秒ほどフリーズした後に、ようやく出た言葉がそれだった。

変態たちの第七話（後書き）

どうも、土曜日に悪友＋後輩＋（計六人）で『ウホツ男だらけの学内ポケモン大会』を開催して見事4位に輝いた中途半端なからすけです。

あれが総当たり戦なら2か3位だったのに……
学内とか言っておきながら開催場所はファミレスでした。

さて、ここまで言えば大体分かるでしょうが、上記の事があったため、ポケモン育成に時間を取られて執筆がすすm ああっ、ロツクオンからのぜったいれいどはやめて!?

まあ、自業自得なんですが。

それに、ちようど（中途半端とも言っ）いい具合に説明とかが入りそうなのでそれは次に持ち越そうかと。

皆様はポケモンの育成は計画的に。

バトルサブウェイが辛くなってきているからすけでした。

誤字・脱字などありましたら報告お願いします。今度は格闘タイプのポケモンの孵化作業しながら死んだ目で修正いたします。

変態たちの第八話（前書き）

前半真面目成分あったので後半はグダグダ成分が過多になっていまずのお気をつけください。

変態たちの第八話

数千年前に誕生した数代前の魔王は恐ろしいまでに好戦的な性格だったらしい。

いつも言っていた言葉は「この世界は俺が統べるべきだ」やらなんやら、かなり物騒なことを言っていたそうだ。

そんな性格なこともあり、当然のように大陸を手中に収めるべく戦争を吹っ掛けたのだ。

当時、様々な種族の国があったが、魔物を利用した魔王の軍勢の働きによって大陸の三分の一はすぐにも魔国に吸収されていった。

当然抵抗はあったが、逆らえば即死刑のような状態が続き、被害者が多数出ると誰も文句を言うこともなくなり、魔王を止める者は誰もいなくなつたそうだ。

残つた他の国は、あまりにも巨大になつた魔国に対抗するべく、同盟を結ぶことになつた。

当時、聡明だつた四つの大国の王たちは、互いに協力しつつ、なんとか魔国の勢いを殺すことに成功した。が、勢い殺すことに成功しただけで、しばらくすると勢いを取り戻した軍勢はまたもや進軍を開始する。

何度と策を立てようがそれが効いたのは初めの内で、次々と突破されていく。

止まってしばらくして進軍、止まってしばらくして進軍。

相手は魔物の軍勢。知性の感じられない魔物たちをいくら叩いても、しばらくすればまた補充されてくる。

そんなことがしばらく続いて同盟に敗戦ムードが漂う中、とある遺跡から、とてつもない魔力の波動が感知されたという。

そこから現れたのは異界より現れし四人の勇者。

彼らがどうして現れたのかわからなかったが、一人一人が強力な能力を持った彼らの協力を得て、同盟は魔王の軍勢を押し返したと言われている。

そこからはこう着状態。

埒が明かないと判断したらしい勇者たちは、どうやったのかは詳しく語られていないが四人で魔国に潜入して当時の魔王を、あまりの暴虐ぶりに反感を抱いていた魔国の者たちと協力して倒したというのだ。その時、協力していた中に魔王の息子もおり、そのまま息子が魔王の席に着いたという。

そうして魔王を倒したのはいいが、その時の余波か、時空に歪みが生じた。勇者たちはその時空の歪みに飲み込まれていった。

「とまあ、初代『勇者』が登場したのがこの時だ」

「なんともまあ……」

現魔王から語られた初代『勇者』とそれに纏わる話を聞いて、煉は難しい顔をした。

「魔国に潜入したってのはかなり無茶があったと思うが、埒が明かないってのは確かにそうだったんだろっな」

「たぶん俺たちみたいに召喚されてこの世界に来たわけだろうから、戦いも激しかっただろうし結構キテたのかもしれないな」

今の時代に呼ばれて良かった、と心底思う煉たちだった。

「それで、今の話を聞くと、『勇者』というのは前回以外にも複数現れたように聞こえるのですが？」

「ああ、そんなに回数は多くないが、数回は確認されているな」

「その時の条件として何かあったりしたんですか？ 意味もなく、『勇者』が召喚されるとは思えないんですが」

「その通りだ。『勇者』が召喚される時、それは暴虐の限りを尽くした魔王が復活するという」

「ということとは、今まで召喚された『勇者』たちの回数だけ、その魔王が復活したということですか」

「同一体と断定したわけではないがな。まあ、その時は我々で抑え込んだり、『勇者』と協力して打ち倒したりもした」

「そして今回も協力して、というわけですか」

「そういうことだ」

「その中に、私たちが元の世界に帰還する方法があるのですか？」

「ああ、最後に時空が歪む、というのがあったらどう？ 前回の『勇者』の言葉に、そこから見えた景色が元の世界だ、という言葉があった」

「つまり、その時空の歪みに入れば、私たちは元の世界に戻ることができるんですね？」

「憶測だがな、という王の言葉を聞いても、煉たちの顔に笑みが浮かんだ。

「そういうことでしたらなんなりと」

「我ら音の四々 ではなく、我ら『勇者』にお任せください」

「史上最悪の魔王だろうがなんだろうと、我らはそれよりも恐ろし

い管理局の白い悪魔を知っています」

「たかが古代の遺物、ターンタイプほど恐ろしいものではないですよ」

最初のころのチキンっぷりはどこに行ったのか、余裕綽々の様子で倒すべき相手を愚弄する始末。

そうなったのは、彼らの心境に変化があったとかそんな進化が見込めるような大層なものではなく、ただ単に緊張感が途切れたただけの話である。

だがしかし、そんな彼らの悪ふざけの言葉は、元の世界を知らない王たちが聞いてイメージしたのは、悪魔どころか破壊神にまでなっていた。

「それは頼もしいものだ。今回魔王が復活するのは一月後あたりだと予想される。それまではこの国でゆっくりしているといい。我ら魔国は主らを歓迎しよう」

この異世界に来て初めて、煉たちは歓迎の言葉を貰った。

変態たちの第八話（後書き）

どうも、この前午後八時に寝て起きたのが午前11時だったからす
けです。

まあ、5回ぐらい起きたり寝たりを繰り返した結果ですけどねw

そんな今は冗談抜きにサイフがボーダーブレイクしかけてますorz

そんな自分は明日も懲りずにゲーセンへ行tt（勉強しろ

変態たちの第九話（前書き）

ちよつとグダグダになって気がします。

え？ 元からだって？

……気長にお付き合ってください。

変態たちの第九話

煉たちは一カ月後といわれている魔王復活まではゆっくりしておこう、と城の客室にてお世話になっている状態だった。

魔王からの協力を受けた日の翌日。これと言ってやることのない煉たちは、食堂にて時間を潰していた。ただのグータラしていると
も言う。

お茶などは自分で淹れさえすればお変わり自由なので、特にやることのない彼らはただ駄弁っている事しかすることがないのだ。その会話の中に、一カ月後に行われるだろうこの世界の行方を決める戦いのことなどは一切合財出ない。寧ろ出さない。

元の世界の話や、この世界にいるケモノミミっ娘のことについて議論しあい、時折休憩時間でやってきた城に常駐している兵に興味を持たれて話しかけられ、萌えや燃えについて熱く語ってこの世界にも同士を作ろうとするが、一部の理解を得ただけで他はあまり理解されなかった。だがしかし、何故か「もつと熱くなれよー！」とか「never give up!!」などのSHUZO語録と
言うべきものなのかよく判らないものは比較的受け入れられていた。十人くらいの集団でSHUZOの如く燃え上がってみたら昼ごはんの準備をしていた食堂のオバちゃんに「煩いよー！」と一喝され、
数分間気まずい雰囲気とともに沈黙していた。

「さて、どうしようか？」

オバチャンのせいで（おかげとも言つ）休憩中だった兵たちもいなくなり、さびしくなった食堂で煉が言った。

「どうするもこうするも、な？」

「何もしなくてもいいって言われはしたけどね」

「やることと言えば魔王討伐部隊との顔合わせぐらいって話だしなあ」

それ以外では、せいぜい体調管理に気をつけて魔王戦に臨むくらいなものらしい。

「明日だっけ？」

「討伐部隊との顔合わせか？」

「おう」

「……なんか、魔王との対決より緊張するんだが？」

「奇遇だな、俺もだ」

そんな会話をしている大輝と栄治に、ダメだこいつ等、と煉が嘆いていた。

そんな時、幸助がなにかを思い付いたかのようにポンと手を叩く。

「なあ、大輝」

「なんね？」

「模擬戦しねえ？」

「なして？」

「暇つぶし。ついでに魔王戦までの戦闘訓練におまけに能力の把握。どこまで出来るか、ってな」

「お、引き受けた。某に任せよ」

「お前等、明らかについでの方を本命にしとかんといかんだろうに。それに、場所はどうすんだよ？ お前たちじゃあ、ここら一体が焦土と化しかねないんだぞえ」

「まああれだよ。軽く組み手、的な感じの」

「おまつ、戦闘民族の言う軽くは俺らで言う死合レベルなんですけどー!？」

「モーマンタイ、モーマンタイ。ということ、煉は練習場所の確

保よろしく」

「何で俺!?!」

「そうだな、煉にまかせるしかねえわな」

「幸助の言う通りだ。俺たちに交渉ごとが出来るとでも?」

「俺もやりたくねえよ!?!」

「おまえもやればいいじゃん」

「後方支援型で何をしろ?!? 戦闘力皆無だぞ!」

そんな言い争いをしていると、大輝が立ち上がった。

「どうした?」

「俺……ちょっと行って来る」

なにかを堪えている様な表情をして、大輝は言った。

「御手洗いと書いてみたらしと読むんですね、分かります」

「個室に六人ですか。アーツ」

「ヤラナイカ」

「やらねえよ。アーン」

「さっさと行って来い」

「漏らすなよ?」

「漏らさねえよ! フリじゃない、フリじゃないからな!!」

「フラグ乙」

さんざんからかわれ、最後には「うわあ〜んっ」と大輝は泣きながら食堂を飛び出していった。

「テンプレテンプレ」

「お約束乙」

「お前等あいつに何か怨みでもあるのか?」

「迷った……」

トイレに行こうとして擦れ違ふ兵や使用人たちに道を聞いていたのだが、見事迷ってしまった大輝がいた。

なんでもないかのような表情をしているが、内心はドウシテコウナツタ……ともの見事にプライド（笑）らしきもの打ちのめされていた。

「いったい、どないせいと」

自分も多少は方向音痴であると認識していたので聞いて回っていたのだが、それでもたどり着かないのには軽く絶望していた。尿意的な意味で。ついでに言うと、何故か周囲に人影はない。

一人脂汗を流しながらいつそ物陰で……と危険な思考にいきそうになった時だった。

「あなたが……『勇者』？」

後ろからそう問い掛けられ、大輝は振り向いた。

目に映ったのは金髪ロングのツンテール。歳は（人間換算で）17程だろうか、整った顔立ちにつり目が強気な印象を持つ美少女だった。

「あなたは……」

「初めまして、私はリリア」

そう言っけてリリアは見定めるかのように大輝を見る。

「妹のフィオナがお世話になったそうね？」

これが後の魔国で、ツンデレの開祖と言われて語り継がれたりリアと『勇者』大輝の出会いだった。

~~~~~その後~~~~~

「今回の『勇者』の一人の大輝といます」

リリアに自己紹介され、とりあえず自分もせねば、と思わず『ツンデレ降臨！！』と叫びかけていたのを堪えて言った大輝。

その瞬間、彼は強烈な、思考を塗りつぶすような衝撃に襲われた。

(又グオアツ……い、いかん、尿意がつ!?)

ただでさえ強烈に感じられた尿意が、リアアが降臨したことにより一部の緊張が緩んでしまったのだ。その結果、更に激しい尿意が押し寄せてきたのだ。まさに堤防決壊の危機である。

「あな　」

「すみませんがつ!!」

「っ!?! ……な、なに?」

言葉を発そうとした時、鬼気迫る表情で尋ねる大輝に思わず飲まれてしまったリアア。

その一方、ここまで『勇者』が慌てるのは何事か、と。

そして大輝は、この状況で恥を覚悟して口を開いた。

「と、トイ　お手洗いはどちらでしょうか……」

「……え?」

「です、から……!　お手洗いは……どちらでしょうか」

思わず目をパチクリさせてしまうリリア。無理もないだろう。想像してたような何か意味ある内容とはかけ離れた様なものだったのだ。

「えっと……その角曲がって次の角を右に曲がったところ……」

だからこそ、思わずリリアはそのまま答えてしまった。

「ありがとうございます！ このご恩はいつか必ず返させていただきます！！」

そう叫ぶように言って駆け抜けていく大輝。その姿は数秒も経たずして角へと消えていった。

「……なんなのよっ！ 全くもっつ」

後に残されたのは、どこか少し疲れたようなリリアだった。

## 変態たちの第九話（後書き）

ギリギリ土曜のうちに投稿完了!!

今見ている番組的に親子丼が食べたくなくなってきましたよ！

もうそんなに長くないと思いますのでもう少しお付き合いください。

## 変態たちの第十話（前書き）

またもやグダグダ感が仕事しすぎてる感じがしますがよろしくお願  
いします。

## 変態たちの第十話

「ドウシテコウナッタ」

「見る！ まるで人がゴミのようだあつ！！」

「フウ」

大輝、栄治、幸助の三人が目の前の光景に、それぞれが嘆き、動揺し、賢者モードに入った。

ギヤアアアアアアツ！！

そして三人が見たその光景、数十匹からなる飛龍の群れが吼えた。

「さあ、行くよ！ 幸助さんたち！！」

そう言って一人駆けて行くショートカットの元気っ娘、魔王の娘の三女であるリース。

笑顔が眩しい彼女の、動きに適しているだろうしなやかな肢体を  
三人は目に焼き付ける。

「俺もここで少しはいいところ見せんとなぁー!」

大輝が金髪に、燃えるような金の気を身にまとう。

「降臨、満を持して」

別のヤツだから!! と突っ込みを受けつつ変身する栄治。

「……モウオモイウカバナイヲ」

他とネタが被るのを避けて今まで散々ネタを出していたが為に、  
一人何か言うことも無く涙を流しながら大輝は突貫して行った。

この場に煉が居たなら言ったであろう一言。

「どっからどう見てもオーバーキルです。本当にありがとっぴんねい  
ました」

哀れなのは、この三人を相手にする飛龍だろう。

どうしてこんなことになったのか、それは遡ること数時間ほど。

〳〳回想開始〳〳

大輝がトイレに行って数時間後、ようやく食堂に帰ってきた時には、煉の姿は見当たらなかった。

「やあやあ諸君。暇つぶしのための場所を獲得してきたぞい」

煉はどこに　と大輝が言いかけた時に、のんびりとした口調で煉が入ってきた。

「早いな」

「どつせやるなら早めに、といつてますよ」

幸助の言葉にホッホッと、思わずイラッ　とくる笑いをして煉は答えた。

「で、どこで出来るって?」

「ん? え〜と、魔国の辺境あたりになるんだけど、そこらならどんなに暴れてもらっても問題ないって。ついでに……てか俺たちにしたらこっちが本命だろう。フィリアさんの妹のリースって娘を迎えに行つてほしいとのことだ」

「よし、今すぐ行こうそうしようグエ」

ヒッターと今飛び出しているこうとしていた幸助をボディブローで沈め、「もちつけ」と一言。

「後、条件がちょっとあるらしくて」

「なんね?」

「近くに村があるらしいんだけど……ちよ〜と困ったことがあるらしくて、リースさんがそれに関わってるらしいんだ。その手伝いをしてくれ」

「まあ、それくらいなら構わんけど。むしろ美少女のためなら当然だ」

「異議なし」

「今すぐ行こうそうしよう」

「そういってお前はどつすんのさ?」

会話の流れから煉が行かない雰囲気を感じ取った栄治が聞いた。

「いやね？ さっきヴォーグールさんと話してた時に、過去の勇者のことについての話があるらしくてっさ」

「んならしゃーねーべ？」

「んだんだ」

「だべ」

「ダメだこいつ等、もう手遅れだったか」

数秒で身だしなみを整え、「場所は！？」「山岳方面でぐふう」とボディブローのやり取りをして、そこらの龍などより遙かに速い速度で小さくなっていく三人を見送った煉は「あいつ等ヌッコロス……」と呟いて倒れた。

くく回想終了くく

「煉の、バカヤロオオオオー！！！」

幸助が一発の弾丸となり、飛龍の群れに突撃する。

金の弾丸は飛龍の体を貫き、勢いが衰えることなく更に別の飛龍を巻き込んでいく。

そうして第一陣・第二陣と突き抜け、最後尾の第五陣の飛龍の群れを突き抜けた幸助は、地表に小さいクレーターを作って着地した。

「オエ”エ”エ”ロオオオアアア」

そして吐いた。胃の中にある朝食べたものを盛大に嘔吐した。

幸いなのは、一人突き抜けて突出していたため、その光景を誰も見ることがなかったということだろうか。

「う”く”んあああ……グロイよおお……」

そんな幸助は、肉を貫き、血が噴出していく様を直に体験したのだ。そういったものに耐性のない幸助がゲロっても仕方ないことだろう。

幸助がこんな状態の中、残りの二人はというと

『 1・2・3 』

「ライダー……キック！」

『ライダーキック』

向かってきた飛龍をキックで仕留めていく栄治。

蹴り飛ばされ、地に落ちた飛龍は何とか立ち上がろうとするが突然、その動きを止めた。

ボンツ、ズドオオオオ……ン

体に電流が走ると、その飛龍は爆散したのだ。なぜか肉片も残らない、悲惨な末路である。

一方、大輝の方はというと、

「お前たちに足りないもの、それは……情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！ そおして何よりもおお……早さが足りない……！」

第一陣飛龍の群れに瞬身の術を使い突っ込んでいく。

「酔舞・再現江湖デッドリーウェイブツ！」

それぞれの飛龍に一撃を加え、駆け抜けた大輝は飛龍の群れを背後に構えを取り、叫んだ。

「ばああくさんっ!!」

その言葉と同時に、飛龍たちが爆発したのだ。

勿論大輝が東方の不敗な流派を習得しているわけでもなく、ただ単に一撃入れる際に起爆札を貼り付けただけの結果である。

そんな彼らの（傍<sup>はた</sup>から見れば）大技っぽくド派手な技が炸裂し、唯一の観戦者はというと。

「おお〜！ 凄い凄いつ!!」

まさに「ワハ〜ッ！」と目を輝かせてヒーローモノのアトラクシヨンでも見ている子供の様だったという。

一方その頃、煉はフィリアに連れられて城の一角のとある倉庫の前に来ていた。

「ここですか」

フィリアより一歩前に出て、どこか禍々しさを感じさせる倉庫の扉を見つめる。

「ええ。そしてこれがここの鍵」

フィリアの手に摘まれた新品のように輝いている鍵を煉は受け取ると、慎重な様子で鍵穴に鍵を居れ、まるで女子でも扱つかのよう  
に丁寧に鍵を回す。

ガチャリ、と音を立てて開錠されたのを確認すると、何故かアラ  
ートが鳴り響く脳内の警告を無視して扉をそつ、と開ける

「こ、これがつ!？」

中のモノを見た瞬間、煉は固まった。

「やはり、これらは相当なものなのですか？」

「え、ええ。それもかなりのものです、ね」

フィリアの声に現実に戻され、煉は思い切って扉を開くと倉庫内  
へと一歩踏み出した。

「これはすg ヒドイ……」

倉庫内に入って直ぐに見えたのは神様でも殺せそうなチェインソーだった。

そして右の棚に置かれているものにも見覚えがあった。

「『名状しがたいバールのようなもの』に『冒瀆的な手榴弾』……だと……！？」

「貴方の反応を見ると、よっぽどのモノみたいですね」

「ええ、こいつはとんでもないものなあ！？　なんで不屈の魂がこんな所に！？」

「この不思議な杖のことですか？」

フィリアが無造作に置かれてあった先端に紅く丸い球体を付けた杖を手にした。

「それは、恐らくですが、管理局の白い悪魔と呼ばれた冥王の杖です」

煉の説明にフィリアはまあ、と少し驚いたような反応をする。

それからはだんだんと見学だけだったのが発掘作業へと移行していった。

↓以下セリフだけのダイジェスト↓

「嘘だっ！！」

「普通の農具の様に見えるんですけど？」

「エ、エクスカリパーだと！？」

「パー？」

「次元連結システムのちょっとした応用だ」

「大きいゴーレムですねえ」

「最強の矛と盾じゃないか！！」

「?? タンスとテーブルでは無いのですか？」

↓ダイジェスト終了↓

あらかた発掘した煉とフィリアは、そろそろ終わりにすることに  
した。

「どうでしたか？」

何故か途中から発掘作業に参加していたフィリアがどこか満足げ  
な表情で煉に聞いた。

「流石『過去の勇者の武器保管庫』……。色んな意味で、濃いところ  
でした。あれがカオスって言うんでしょうね……」

どう見ても疲れた様子の煉が力なく答える。

「貴方と同じ『勇者』のモノなんですけど」

「どうやら私たちには使えそうに無いですね。手に持ってみました  
けど何も反応はなか、った……し？」

言葉が尻すぼみになった煉は、倉庫を出ようと扉の方向を向いた  
ところで固まった。

「どづかしましたか?」

「いえ、ひょっとしてこれなら……」

そう言いつと、煉は壁に立てかけられていたモノを手にする。

「これはっ……。これなら!」

その時の煉の顔は非常に怪しいものだった。

## 変態たちの第十話（後書き）

もうこれで主要キャラは九割がた出しました。

モンハン3rdが楽しすぎて辛いです。

時間がどんどん無くなっていく……orz

## 変態たちの第十一話（前書き）

一週間以上すぎてしまいましたが無害です。

全てはモンハンの陰謀だと言いつつ（ry

## 変態たちの第十一話

「『パー?』のところで首をかしげたフィリアさんに、思わず鼻血が出ましたけどなんとか隠しきった煉です」

エクスカリパーの思い出してニヤニヤする煉に、幸助たちは「密室で二人つきり……だと……!?」と驚愕したり、「デートですか? デートなんですか?」とか妬みのオーラを全開にしていたり「リア充タヒね」と藁人形と五寸釘まで具現化してきそうな勢いである。

「しかしまあ、今までの勇者さまも随分と自重という言葉置き去っているな」

「この世界でメイ オーをしてみたいどうする気だったんだか」

「次元連結システムのちょっとした応用に決まっているだろ、jk」

「情熱的に(j)考えて(k)ですねわかります」

などと無駄な考察(と言う名の駄弁り)をする煉たち。

こんな気楽にしているのだが、今彼らがいる場所は控え室。

後数分もしたら表の闘技場で討伐部隊との模擬戦が始まるので、作戦会議室として与えられたのがここだった。



「『ドウシテコウナッタ』」

煉たちは文字に表すとorzと表現できなくも無い状態になっていた。

その原因はこれから行われる『勇者VS勇者』一番つおいは誰だ!??』というイベントだった。

内容はいたって簡単。

四人でバトルロワイヤルである。

このイベント戦が行われる切欠となったのは、リースの一言で『誰が一番強いのかな?』が引鉄だった。

「なんか乗り気じゃないみたいだね?」

「何でかしら?」

「優劣を付けたくないとか?」

「友人と戦いたくないとかかしら?」

などと姫様方が考えていたりするのだが、実際に彼らが思っていることといえば、

(何でもこいつ等みたいなめんどいやローとやらなきやいけないんだよ……)

(しかし、美少女リースたん　ちゃんの提案だからなあ)

(断りたいが断れないお)

(もし断るとしても、それを言うのは俺だろうが！　このボオケエどもー！)

と、ひそひそ話でかなり低レベルなところで言い争っていた。

(ボケって言う方がボケなんですー)

(じゃあバカか?)

(バカじゃねえよ!!)

(そうだ、訂正してやれ。こいつはアホウだ)

(てめえ……)

一瞬の沈黙。冷たい空気が辺りを支配する。

「「「「よっしゃ！ やってやるっじゃねえか！」「」「」

四人が一齐に叫んだ。

「おお、やる気になったよ！ リリねえ！」

「はいはい、黙って観てなさい」

「あらあら」

「わくてか」

約一名、染まってきたりいる者もいる気がしないでも無いが、フィオナたちも最初から観戦モードである。

その時誰かが、「だ、誰かに見られてる！？ ダメ、かんじ」といいかけたが、周りに居た他の三人に強制沈黙させられた。

「よし、大輝<sup>アホウ</sup>は放って置いて、ルールでも作るか？」

「殺さない程度」

「一人だけ集団リンチ無しの方で」

「おk、後は……やり過ぎないぐらいでいいか？ それぞれの能力に制限を掛ける感じで」

「てかどう考えても煉が勝てるビジョンが浮かばない件」

「いいのかな？ そんなこと言っていて……」

不敵な笑みを浮かべる煉に、それぞれがイヤな予感を感じつつ『勇者VS勇者』一番つおいは誰だ！？』は幕を開けた。

「先手必勝！ いつかの（閲覧削除）のお返しだつ、エイジィ！ 死ねよやあああ！！」

「メッセンジャーボーイかよ！」

幸助が突貫しクロックアップを封印した栄治が迎え撃つ。

そこに一枚の紙がひらひらと舞い落ちる。

それに気を取られた瞬間には、それは爆発した。

「ふははははは、爆発は芸術だあ！！」

大輝の起爆札である。粘土を使わなかったのは慣れていないからである。

完全に脅威と見なされなかった煉は放置状態にあった。

そのことを認識すると、煉はうすら笑いを浮かべてギターを構えた。

「お前らあ！ 俺の歌を聴けえ！！」

何かやってんぞ、とみんなの注意が煉に向くが、大したことは出来まいと心の中や鼻、口で笑った時だった。

「カーシーミノー」

「うおおおあああああ！！」

「やめろおおおおおお！！？」

「誠氏ねえええ！ 誠氏ねえええええええ！！」

見事なほどの精神攻撃である。

トラウマを防ぐためにも、三人が一齐に煉へと襲いかかるが、煉はあわてている三人の単調な攻撃をひらりくらりとかわしていく。

「~~~~ あ、終わっちった」

「……曲の切れ目が貴様の命の切れ目よ！」

「煉、覚悟しろやあ！」

「天誅っ！」

「まだです！ サラマンダーよりはやーい」

「貴様ああああっ！！！」

「もうやめてくれえ！」

「あいつは死んだ、あいつは死んだんだ」

某三大悪女ネタも、一時の隙を作ることしかできない。復活した三人は、NTRでもされたのが如く恨みのこもった目で煉に一斉に襲いかかる。もはやルールなど存在しないかのようだ。

「ふんっ、俺が何の対策もないままだとも思ったか！！！」

煉はどこから取り出したとある両手に取っ手のついた金属製の棒を手にした。

その武器の名は『トンファ』。

このトンファ、前回の保管庫で煉が見つけたモノである。なぜこれだけ使用できるかは不明。

それを持って煉は彼らを迎え撃った。

「喰らえ！ トンファ・ビームっ！！」

煉の目からビームが出た。

「ちょ、おま アベシッ」

あまりもの攻撃に、栄治は何かを言う間もなく弾き飛ばされた。

「トンファ・ブレイクッ！！」

トンファを装備した煉は、大輝に向って肩からタックルを決める。

「なんでんなものが ヒデブウッ！！」

そして残ったのは幸助ただ一人。

「どうしてだよ……なんでおまえがそんなものを持つていやがる！  
煉っ！？」

「くっくっく。なあに、過去の勇者さまが使っていたらしいぞ？  
俺も使えるようだがなあ！！」

やり取りと表情を見る限り、煉はどつ見ても悪役である。

「トンファ・ラリアット！」

「うおお」

「トンファ・ネイルクロー！」

「うわっち」

「トンファ・無影脚！」

「アンドウトロワ！？」

煉が数々のトンファ技を繰り出していくが、それを幸助は薄皮一枚といったところで避けていく。

しかし、それも長いことは続かなく、『トンファ・頭突き』の一撃をくらってしまい、よろめいてしまった。

そんな隙を煉は見逃すわけもなく、いい笑顔で笑った。

「止めだ!!」

煉が大きく飛び上がり、

「トンファ・インパクト・キイイイック!!」

「おま、トンファ今まで関係した事無k　アッーーーー」

飛び蹴りがさく裂し、幸助もまたあとの二人を追うようにトンファの技の数々に飲み込まれていった。

勝者　煉（トンファ装備）

〓〓医務室にて〓〓

「なぜにトンファなんだよ!!」

「俺たちが勝てるわけないだろう!!」

「くあすえ d r f g ふじこ I p . @」

ベッドだけが人三人が文句タラタラである。一人壊れている者もいるが大丈夫だ、問題ない。

「お前らがルール無視の三人で掛かってきたから仕方なくだなあ」

「よく言うだろ、勝てば官軍」

「負けてんじゃねえか」

「おふう」

「だがお前らのほうが得してるって言うのはどういことだよ!？」

「日ごろの行いだろ」

「左に同じ」

「同じく」

「なんでこんな奴らに犬耳ナースが付くんだよおおおお!!」

うわあああああん、と泣いて煉は医務室を飛び出していった。

「流石にやりすぎ……ではないな」

「大丈夫だ、問題ない」

「問題ありすぎるおまいらにワロタ」

お前もその中にはいつてんだろ、という（物理的な）ツッコミを受けて栄治は沈んだ。

その後、一人フィリアに泣いているところを見られ、慰められている煉の姿があったとか。

変態たちの第十一話（後書き）

モンハン3rd楽しいですね！ といった一週間を過ごしました。

おかげで大幅に遅れたんやな。

こ、今度こそはちゃんとするんだからね！ う、うそなんk（大樽

G

変態たちの第十二話（前書き）

前回から一気に飛んでいます。

キング・クリムゾン！

冬休みまでキングクリムゾンしてくれたら嬉しいんですけどね？

## 変態たちの第十二話

アーーーーーッ、という間に月日は流れ、早一ヶ月近くが経ち、いよいよ（旧）魔王討伐の時が来た。

この一ヶ月間煉たちはと言うと、主に魔国内に出没した魔物などを討伐していた。「リアル魔物狩り……」と誰かが呟かなかつたのかなんだとか。

それはそれは充実した一ヶ月間だったのだ。主に命の危機的な意味で。

辺境の村からの依頼が出れば比喩ではなくひとつ飛びで駆けつければ、繁殖期なのか荒ぶる飛龍たちが群となって襲い掛かってきたこともあれば、山の様子が可笑しいということと息抜きに調べに出てみればそれは火山で噴火直前だったのを止めたりと、なにやらどこに行っても厄介ごとに巻き込まれていたのはいい思いである。

飛龍を追い払い、自然災害を止めたe t c . . . その結果、彼らは魔国での評価はうなぎ上り？とクエスチョンマークが付くところくらいまでは行っていた。勿論無償奉仕などではない。報酬としてお金というのもあったが、元の世界に戻る予定の彼らには必要ないもので、代わりのもので主に食べ物中心の嗜好品を貰っていた。

そんなイベント事がたくさん起きたわけだが、その原因は魔王の復活に関連しているのだとか。

本来、こんなに多く厄介ごとが重なることはそうないらしい。もし起きていたら魔国自体が存亡の危機に陥っているだろう。

どうやら魔王復活の時間が近づくと世界が不安定になるらしい。

復活した際はどうなるのか分からない。どうにかなる前に『勇者』が倒しているので前例が無いのだ。

とりあえず、原因と思われる魔王を倒せば終息すること。

魔王復活まで後、数時間。

「てな話らしいぜよ?」

「いや、どんなけ世界に迷惑を掛けたら気が済むんですか、遙か昔の魔王様」

「おまいらも人の事言えんのか?」

「べべ、別に、おおおおおいどんはそんなことねえんだんな」

「不審者乙。色々混ざりすぎて酷いことになつとるぞ」

魔王復活まで後僅かだというのに、彼ら勇者は余裕だった。

「親に迷惑を掛けてるんですね。分かります」

「ニートじゃねえんです。自宅を警備してるんでっ」

「俺、元の世界に帰れたら自室警備員になるんだ」

「ダメ人間に死亡フラグがたつたお」

いや、余裕と言うよりはダメすぎる気もしないでも無いが、一応《何とかなるだろう精神》が作用しているせいと言うべきだろうか。

この一ヶ月間の出来事が彼らに心のY 《何とかなるだろう精神》が植え込まれたのだ。

そんな彼らは今、その『魔王』が復活されるという昨夜のキャンプファイヤーという楽しい思い出が残る遺跡まで来ている。

そして彼らを見る魔王討伐部隊の面々。この一ヶ月間、煉たちの（変態的な意味も含め）強さを間直で見してきた彼らは、この勇者たちの行動が心の平静を保つためのものだと理解している（つもり）。一部フィオナたんハアハアやりリアちゃんまじツンデレ！ などと叫んでいたりするものもいるあたり、かなり汚染されているといってもいいだろう。

そんな感じでカオス具合を醸し出していると、隊の前に現魔王が立った。

その時には既に皆、煉たちも背筋を伸ばし、討伐部隊の一部として整列する。

「諸君。今から」

始まったのは激励の言。

その最後は皆生きて帰ってくるように、と締めくくられた。

今から始まるのは魔王が復活するといわれる目の前の遺跡の最深部までの攻略。

まずは入り口入ってすぐの通路を塞ぐ崩れた遺跡の一部を取り除く作業から始まった。

魔王との戦闘があると予想されるので、体力温存の為に撤去作業からはずされた煉たちは早速暇を持て余し始めていた。

「ところでこれはどこのRPGですか？」

「はいはい、RPG系が苦手な俺が通りますよ、と」

「煉さんよ、なんか情報はねえんかい？」

「説明しよう！！」

この遺跡に今までに何度か調査隊を送ったりしたことはあるのだが、調査隊が調べることには遺跡の内部が変容し、情報はそれほど集

まらなかった。

「……どないせいと？」

「内部について分かっている情報が、遺跡内が毎回変わることで、魔物の類は出ないけどトラップが数多く確認されているぐらいです」

「なあなあ、思ったんだけどさ」

「なんね？」

珍しくも、少し考え込んでいた幸助が思いついたとばかりの笑顔で手を上げた。

「面倒くさいから地下までぶち抜いてもいいですか？」

「なんとという迷案」

「そんな馬鹿げた事一度思いついた後考えもしなかったわ」

「わーさすがだなー」

まさにフルボッコである。

実はこの内容、ヴォーグルから事前に情報を聞いていた煉がその

事を聞いて見たのだが、その返答は遺跡内部が崩壊するかもしれないからやめてくれ、と言うものだった。他の二人もその事を思いついて煉に提案していたりする。

幸助をポッコボコにして凹ませた三人だが、全員同じ穴の貉である。

「あら、どうかしたの？」

幸助の心折られた姿（想像にお任せします）に何かを感じたのか、フィリアが話しかけてきた。

「いえ、なんか自爆したみたいで」

「そうなの？」

「ええ、気にするほどではありませんよ」

「それならよかった」

フィリアの笑顔に思わず鼻血が出るかと思った煉だったが、気合でごまかした。

それよりも気になることといえば、なぜこの場にフィリアがいるのか、と言うことなのだが、それは魔国の特徴とでも言うべきなのだろうか。

人間の国ならば姫、王もだが前線に出てくるということはまず無い。

しかし魔国と人間の国は違う。

この魔国では魔王<sup>II</sup>最強クラスの実力者で、前線に立って兵たちを率いるのが魔国の気風なのだ。そしてその子供である姫たちもこの魔国内で相当な力を持っているのである。フィリアは防御、治癒といった後方支援。リースは前線に出て戦うタイプで、フィオナは召喚という能力的に部隊全体のサポートに回っている。リリアはオールマイティの攻撃魔法よりといったところろから、遊撃となっている。

これは魔国内が一致団結しているから出来ることといえるだろう。王族が全員出払っていてその間にクーデターでも起こされたら大問題だが、それが起こらないのは魔王がしっかりと王としての勤めを果たしており、臣下もそれを支えようとしているのである。

元の世界よりこの魔国のほうがずっとまともなことに、煉は若干帰る気力を失いかけたが、萌え・ロボ・勇気・友情・熱血・愛・根性・ど根性etc...中盤以降某超機人大戦風になってしまった気がしないでもないがそれらを思い浮かべて元の世界のいいところだけを意識する。

「そうそう、戻ったら思いっきり部屋に引きこもりながらゲームして本読んだりして……」

ブツブツ眩き始めた煉に、頭にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げるフィリア。傍から見れば相当不思議な光景である。

しかし、その他にも変な組み合わせはある。

よう、よを肩車して野営地を駆け回る変態。未だに他の三人からフルボッコにされてへこんでいる幸助に肩を叩いて慰めているリス。そんな彼らを見て「神経張っていた私って一体……」と肩を落としているリリアを大輝が慰めていたりする。

この一ヶ月の間に結構距離を縮めていたりする煉たちだった。

「サラマンダーよりはやーい」

肩車されていたよう、よが彼らに教えられていたこと（模擬戦の時のことを覚えていた）を思わず口にしたせいで現場は更なる混乱を極めた。

運よくトラウマを作ることのなかった煉を除き、他の三人は歯を食いしばって意識を飛ばす者も居れば突然泣き叫ぶものが居たりした。煉が言ったのとフィオナが言ったのでは、精神的ダメージの差は計り知れない。特に栄治は表現するのが躊躇われるほどひどい状態になっていたのだが、フィオナを肩車しているので堪えているようだ。

討伐部隊の内の一割程が戦力外通告を受けるほどの混乱をもたらしたこの言葉は魔国で禁句になったりした。

それからちょっととして、通路の開通が完了した声が上がった。

## 変態たちの第十二話（後書き）

ひゃあ！ 前回から一気に一ヶ月ほど飛びましたよ！

まあ、一ヶ月間をグダグダ書いても仕方ないですからねえ。省略できるところは省略させていただきます。

さてさて、いよいよ終わりに近づいてきました。

後エピソード含め三話程でしょうか。

今年中には終わらせてやんよ！！

フラグなんかじゃないんだからね！ 本当なんだからね！！

てなわけでした、この『とある世界の四人の勇し y 変態たち』略して『変態』をよろしく願います。

## 変態たちの第十三話

↳ 遺跡内部・地下第13階層にて

「なあ、いつまで続くと思う？」

「どうした、いきなり」

一時休憩中の緩んだ空気のせいだろうか、唐突に大輝がポツリと呟き、隣で座っていた栄治が面倒くさそうに対応した。

「いやさ、既に遺跡に入って既に3日目。未だに奥が見えないんだがこれはどうよ？」

そう、彼らが遺跡攻略に乗り出してから既に3日の時が過ぎていく。その3日の内に13階も降りたことを考えれば素晴らしい速度なのだが、この世界に来て数ヶ月経つがやはり現代っ子、大輝は今の閉鎖された空間に飽き飽きしてきているのだ。

これがゲームとかなら数時間で攻略できるものなのだろうが、そこは仮想と現実。そこまでは甘くは無かった。

もしここで魔物とか出てこようものならそれらをストレスの発散にでも出来るのだろうか、生憎今のところ魔物の出現は先遣隊から

は報告されていない。トラップの解除はそれ専門の者が殆どしているし、やる事が無いのが彼らの現状だった。

「余計なことを言うな。嫁が曇るだろ？」

「お前もゆっくりとしてればいいんだよ」

そう、この問題はあくまで大輝の問題であつた。

今この場に居る幸助と栄治は、自分の脳内から作り出した嫁たち（若干姫様成分も混じってきたが）で余裕のよっちゃんとかかりに凌いでいるが、大輝は二人と違い、自分の想像から嫁を作り出す、ということとは苦手な分野に入るのだ。勿論作り出せないわけではない。しかし他の者より熱血、ロボットよりの大輝は、元となるの二次元があつてこそちゃんとカバーできているのだ。甲斐甲斐しく世話をしてくれるメイドロボなるものを想像してみるも、顔の部分は霞み、そこから全体像が崩れていくのだ。

「ストレス発散に壁でも殴ってみたら？ 気晴らしにはなる……やも？」

「疑問系なのが果てしなく気になるが、まあいい、その案に乗ったぞ！」

「壁壊さない程度にしておけよ」

「まっかせなさい」

こんなやり取りが出来る辺り、かなり余裕はあるのかもしれない。

「よっほっ、食料貰ってきたよっん」

そんなところに休憩中として軽食が配られたので、ジャンケンで負けた煉が配布された食料をとってきて笑顔で戻ってきた。

何故笑顔かと言うと隣に居るフィリアが関係しているであろうことは明白である。

とまあ、そんな意気揚々に戻ってきた煉だった。

が

「セイヤッ!」

ガゴン

「は?」

「ひ?」

「ふ?」



とりあえず落下してきた頭上を見てみると、広い天井に四角く穴があり、そこから見える遙か遠くに光が一点差し込んでいた。

『だいじょくぶですか？』

恐らく覗き込んでいるのであろうフィリアの声が、かなり小さいが煉のいる地点まで届いた。

落下した衝撃による以上はないかを確認して、何も問題ないことを確かめると無事なことを伝えようとしたが、その前に上に見える光が消えた。

一瞬の後、自分が落ちた床が閉じたのだと煉は理解した。

「ごないしましょ」

「まず……俺らの上から退けやあぁっ！！」

ポツリと呟いてみると、真下から反応があった。

何故か見事なまでに、栄治たちが三人並んで煉の下敷きとなっている。

「うおっ、お前等いつの間にも男に踏まれて喜ぶような性癖をっ！？」

「踏んでくださるのがおにゃのこならご褒美だが、俺たちや男に踏まれるような趣味はねえよ!！」

煉はその言葉を聞いて「安心、と傍から見るとゆっくり目に三人の上から退いた。

「ダメツ、感じちゃ　　な、何をするっ!？　やめろっ!　は、離  
sギヤアアアアア」

悪ふざけでも言わせていい事と悪いことがあるので、三人は幸助に捌きの鉄槌　恐怖のトリプル泣き爺を決めると、原因と今後の方針を決めるため話し合うことにした。

「なるほど全ては大輝のクソボケおたんこナスが原因か」

「さて、色々ひどいぞ」

「ああ、もはや人としてどうかと思うくらいの知能の低さだ」

「お前等そんなに俺のこと嫌いか!？」

放って置いたら大輝が、部屋の隅で体育座りしての字を書き始めたのでそのまま置いておくことにした。下手に突っついて怪我などしたくないのは煉も栄治も同じなのだ。

「さて、馬鹿どもが静かになったところで本題に入ろうか」

「これからどうするか、だな」

ダウンしている二人に辛辣かもしれないが、これはまあしょうがない事なのである。

彼らの中にもそれぞれの傾向と言うものがある。

幸助と大輝が直感や条件反射などで判断したり答えを返すことが多いのに対して、煉と栄治は（比較的）考えてから動くことが多いのだ。

前者の二人がいたらこの場は話が進まなくなりそうな気がした後者の二人は、同じ結論に至りアイコンタクトもせずによく話が出来た状態を作ったのだ。ある意味、四人全員が互いのことを常日頃から理解しているからこそ生まれた結果といえる。

「進むか戻るか、だが。どうする？」

「戻るつつつても……元居た階に？がる穴が無くなってるし、無理でね？」

「ですよー。進むしかないと申すか」

「ゴー・アヘッド」

部屋を見回してみるとあるのはどこかに繋がっているのであろう  
出入り口が1つ。……二人が居ても同じ結論に至った気がしない  
もないが、問題はない。

結論が出たら後は行動するだけ。

「はいはい、さっさと起きろよおまいら」

栄治が声をかけると、ウボオアアアと奇妙な声を出してどこぞ  
からか蘇った亡者の如くヨロヨロと立ち上がった二人。

「話は聞いてたたる？」

「「サー・イエス・サー！」」

「よろしい、ならば戦そ ゲフンゲフン行動開始だ」

「具体的にはどうするんだ？」

「出入り口は一つ。全員突撃でいいだろ」

「あ、なんかテンション上がる曲頼む」

「あいや、了解」

無駄口叩きながらそれぞれが出入り口へと向かう。

「さあ、始まるぞますよ」

「いくでガンス」

「ふんがー」

栄治たちはこの時、「ここまで振ればあの曲が来るだろう」と思っていた。

「ラビッツ」

「「「え?」「」」

だがしかし、彼らのそんな期待を真つ向から裏切った煉がチヨイとしたのは運動会の時などに良く流れる『天国と地獄』だった。

「彼女を思うと」

「SE Aのやつかよ!?!」

「ラビイッツ!?!」

「ヒヤッハー、テンソン上がってきたZE!?!」

見た目的に地獄だったが、それが開幕の合図だった。

『彼女の笑顔が』

「畜生、なんて選曲だよ!!」

後ろから聞こえてくる煉の歌に、気をとられた瞬間、ガコンと  
にかを踏み抜いた感触と同時に、真上から槍が降ってくる。

「甘いわ!!」

「それしきのことでえ!!」

「ぬぼあ」

それぞれが見事な反射神経で槍を左右にずれて避けるが、避けられるのを想定されていたのだろう更に彼らが避ける地点の天井と、人の肩幅はあろうかという何か落ちてきた。そのことに気付いたのは煉だけだったが、一瞬の逡巡の後彼は歌うのを優先させた。その結果、槍を避けたことで油断しきっていた彼らはそれを避けることができなかった。

そして鈍い音が響く。

ガン×3

「うがつ!?!」

「はぁっ!?!」

「へぶしっ!?!」

見事な金ダライが三人に命中した。

数時間ほど走りぬいただろうか。その途中もトラップが襲い掛かってきた。

その様々なトラップを見事回避し続けながら、回避した直後や気の抜けた一瞬を狙ってやってくるトラップ（笑）に痛い思いをしながらも突き進んだ彼らに聞こえてきたのは、誰かと何かの叫び、そして戦闘音だった。

## 変態たちの第十三話（後書き）

どうも、メリークルシミマスなからすけです。

今日一日洗濯物とか以外で部屋から一歩も出てやらなかったぜ！

この小説も残すところ（一応）二話となりました。

今年中に完結目指すよ！

## 変態たちの最終話

「な、なんじゃこりゃ……」

戦闘音を聞きつけ、いざ駆けつけてみれば、広間らしき所で行われていたのは討伐部隊の偵察隊と思われる十数人の魔族と、数十体の鎧が戦闘していた。

「何が何だか分からんけど、助けるぞ！」

偵察隊の状況が不利と見てか、幸助が飛び出していく。

「うし、そのまま幸助と栄治で鎧の殲滅！ 大輝は負傷者を後方へよろ。そっちで俺が傷を見るわ（見るだけだけ）」

「よろしい、ならば殲滅だ」

「はいはい、回収役が通りますよ、と」

一応司令塔的な役割を持っていることになっている煉が指示を飛ばし、それぞれが行動する。

「しかし、何と他愛のない。鎧袖一触とはこの事か」

目の前で公開されている解体大会（手段・方法・結果問わず）の、助けられた偵察対の面々も引くくらしいの一方的な展開に、煉がどこぞの悪夢を髣髴させるセリフを言った。

「相手が鎧だけに、てか？」

さつさと重症っぽい者から後方に下げていた大輝が笑いながら言った。

「ちなみに鎧袖一触とは、鎧の袖が一回触れただけで簡単に敵が倒れる様なことを言うのだが、彼は鎧が見せかけのような物という意味とでも思っているのだろう。全く持って情けない限りである。まる」

「……………マ・チ・デ？」

「マチだ」

「さ、サアテ、オシゴトオシゴト」

冷なのか脂なのか、なにやら汗をかきながら自分の役割に戻っていく大輝を煉は冷たい目で見送った。

後方ではそんなコントみたいなやり取りをしていたのだが、前線では幸助と栄治が延々と鎧の破壊作業が続いている。

「こいつら倒しても倒してもキリがないんですけど!？」

中身のない鎧の三十体目を倒したあたりで数えるのを諦めた幸助が悲鳴ともとれなくもない声を上げる。

「まあな、こいつら破壊した所からどんどん修復されていつているみたいだし」

幸助が破壊を量産している光景を冷静に見ながら、次々と鎧を砕いていく。しかし、栄治の言葉道理に破壊してちよつとすると、鎧が自動修復機能でも付いているのか散らばった破片が組み合わさり新品並に輝いて再び襲ってくるのだ。

「なに、この無限ループ？ 怖い」

「塵芥すら残さずに消滅させればいいんじゃないかね？」

栄治の提案も、それはこの遺跡の崩壊も意味していませんか？ という懸念の声が挙がり、幸助がただの壁役（遺跡を巻き込まない保証がないため）としてしか意味をなさなくなってきた。

「なーなー、煉さんよお！ どおするよおー！」

剣を振りかざしてきた鎧を栄治は蹴り碎いて、煉に問いかける。

「どおーしよー!？」

「いやいやいやいや、それって　な、何をする、貴様ら!？　ノ  
アアアア!？」

まさか聞き返されると思っていなかったので、思わずツッコミを入れようとして立ち止まったのがいけなかったのか、その隙を突かれて栄治は鎧の波に飲み込まれてしまった。

「おお、勇者よ……死んでしまうとは情け」

「まだまだ！　まだ終わらんよ!!！」

数体の鎧にしがみ着かれつつ、ロリコげふんげふん、某赤い彗星のセリフで鎧の山をはね除けてウガーツと復活する栄治。

それと同時にクナイガンで張り付いている鎧の排除に掛かる。

「ところで今まで放置していて悪かったけど、これはどういう状況

よ？ 本隊は？」

煉が今更な気もするが、比較的傷の浅い者から煉たちが討伐隊から離れていたこの数時間で何があったのか問いかけた。

「はっ、皆さんが落ちてから」

要約すると煉たちが落ちて一時騒がしくなったけど、あの人たちなら問題ないだろうと判断して、まずは隊が進むことを優先したそうだ。そして広間のようなところに入ったところでランダム転移の魔方陣が展開され、隊全体が今いる付近の広間に転移したらしい。位置を確認するためにも偵察隊をいくつか出したそうだ。そしてその偵察隊の一つがこの部隊で、ある部屋に近付こうとした時に壁際に飾られていたらしいこの鎧が動き出したとのことだ。そして現在進行形で鎧は湧いて出てきて増えている。

「メガっさこの先が怪しいじゃないですか」

寧ろ確信の様なものがある煉は思わず「やだ〜」と言って、話してくれた者に引かれているがテンションの関係か気付いていない。

(としてもまあ、この不死身？ 軍団が本隊の方に行っても面倒くさいよな。まずは全体の情報か)

「大輝、現状を本隊の方へ連絡しに行ってくれ」

方向はこの道を通り直ぐな、と通路の一つを指して指示を飛ばす。

「あーいよ。んで、なんと？」

「ターゲットのいそうな怪しい場所を発見。不死身鎧軍が邪魔、なんとかそつちで対処してくれ。俺らはこの場を突っ切つて様子見、出切れれば対象の撃破だ。後は、本隊の様子も見てきといて。こつちみたいに襲われてないか」

「おk、把握」

指示を受けると大輝は、どこのスピード狂なアニキのセリフを叫びながら突っ走って行った。

「さて、後は待つだけ「ただいま」早いなあ。結果は？」

「ここは任せて先に行けえ！ 的な。向こうは襲撃無しだったよ」

「だいたい分かった」

さてと、と煉が呟く。これからいつのまにか百体まで増えているかどうかというぐらいまで増殖している鎧を突き抜けないといけないのだ。

問題としては、今煉たちが抜けると負傷して行動に制限のある偵察隊の面々が危険に晒されるということだ。

「はっは、ここは私等に任せて、先に行ってください」

煉の考えていることが分かったのか、偵察隊の一人がそんなことを言った。

「たかが鎧、俺たちでも時間稼ぎ程度ならできますって。本隊が到着したら大丈夫ですし、いざとなったら逃げれば良いんですから」

「よし、そこまで言うのならここはお前に任せようか」

「ちよっ！？ 先輩それはないですって！ かわいい後輩を見捨てるんですか！？」

若い魔族の青年の言葉に、偵察隊の面々がからかっていく。

「なら、ちよっくら頼みましたよ？」

「おう、任せとけい。というか早くこいつ等の原因を止めてくれたらこっちが助かるんで早めに何とかして下さいお願いします」

「たいちよー、最後が情けないです」

「やかましー、本当のことだろうが！」

「はいはい」

後ろから聞こえてくるやり取りから、ニヤニヤしながら煉は茉治たちに指示を出し始める。

「俺等は鎧を突破してこの先に行って様子見ですね。わかりません」

「別に、倒してしまってもかまわんのだろう？」

「はい」

「はい、元気良く手を挙げた大輝君」

「ものごっそいこの奥から禍々しい気配がビンビンに感じるんですけどー！」

大輝の言う通り、煉たちが突破を目指す鎧の奥にある通路からは、ドス黒い何かを感じられる。というより黒い何かが目に入ってきてはいるのだ。

「問題は、誰が先頭に行くか、だが」



「『勇者』だけにいい格好させるかってんだ」

「俺、返ったらあいつに告白するんだ」

「はい、死亡フラグが成立しました」

そんな一種の頼もしささえ感じる声を聞いて、煉たちは通路を駆け抜けていった。

「なあ、あからさまじゃねえか、これ？」

「大丈夫、俺もそう思った」

「漏れも」

「奇遇だな、以下略だ」

途中何度か鎧の妨害を受けていたが、その度に粉碎して復活する前に駆け抜けていき、何階か降りていった結果、一時間もたたない内に最奥の間らしき扉の前に来ていた。

その扉の隙間からは黒い何かがうにようによと伸びていたりするのだが、存在しないモノとして扱っている。



「今から復活ですか」

「ということはお約束として待たなければ……」

「なんて言つても思つたか!」

代々歴史のあるお約束を無視してそれぞれが好き勝手に魔法陣へと攻撃を加えていく。

「ふう、いい仕事をした」

出てもいない汗を拭って笑顔でそう言った煉に、うんうんと頷く他三名。

「それにしてもなんも変化無くね?」

栄治の言つとおり、今のところ時空が歪むどころか空気の流れすら変化は内容に思える。

「実体化してから倒さないといけなかったか……?」

「……はっはっは、なにゆをばかにゃ」

「嘘だといってよ!」

「バーニイイイ!」

そんな風に彼らが悪い方向に考え始めたときだった。

部屋の中に渦巻く黒いナニが部屋の中央、魔法陣があった地点に集まっていく。

「お、お、お?」

「これはこれは?」

「ま・さ・か」

「きたーーーーー」

そして全てが一点に集まり、直径三メートルほどの球体になった。

球体からドクンドクン、と鼓動が聞こえ、人の憎悪の叫び、獣の様な咆哮が上がると球体のはじけ、その姿を現した。

「な、なんという」

その人のような頭の額からは二本の角が生え、筋肉質な身体は全

身が漆黒で塗り固められた人のようで人でない存在がそこにいた。

「これが魔王、てかなんて霊帝ですか。てか意識がなさそうな件について」

「本能のままに戦いを求めるんですね分かります。それと誰か、アカシックレコードを味方につけてくれ」

「知性より戦闘に重視を置いた結果ですね、わかりません。てかアカレコとかむりば」

なんてアホなことを抜かしていると、漆黒のそれは腕を振り上げてー

「おっぱい！ おっぱい！」

「えーりん！ えーりん！」

振り下ろした。

なにやらバカなことを言っていた栄治と幸助と言う者が漆黒の波動に飲まれて「アーーツ」と吹き飛ばされていたりした。

「バカばっか」

「俺、帰ったらルリルリ見るんだ」

「お前等だけ逃げてるんじゃないか！」

栄治の文句に「バカなこと言ってるんじゃないか」と返すと、そろそろまじめにやらないか と言う意見も上がり、波動から逃げ出す作業を一旦止めてそれぞれが攻撃を加えていく。

「どりゃあああああ！！！」

気を纏った拳が魔王を貫いたが、すぐに修復されて効果がない。

「螺旋丸！」

弾け飛んだがこれも修復されて効果がない。

「ライダーキック！」

これも以下略。

「これ、なんて無理ゲー？」

と煉が言うのも無理はなかった。攻撃が効かないのだ、仕方ないことだろう。

「れーんー。テンション上がらないから何か歌って〜」

「一発宜しく〜」

「了解〜。それでは一曲目、『SKILL』！」

無敵さあ〜　と煉が魔王の攻撃を巧みにかわしながら歌い、他の三人もそれによってテンションを上げるために一緒に歌う。

煉たちの攻撃もテンションに比例し、激しくなっていくが、攻撃を加えても魔王はすぐに修復する。

「波あああああ！！！」

そんな中、幸助がだめ元で全体的に消滅させてやろうと放ったエネルギー波が魔王を飲み込んだ。消滅したように見えたが、次の瞬間にはまた復活している。しかし、今までとは決定的に違うところがあった。

「歪んでる?。」

修復したときにに身体の一部が歪んでいたのだ。

「このままやってりゃいいのかねえ？」

「ついでに動きまで悪くなってらっしゃる」

このままいったら何とかなるんじゃないか？　と思いはじめたが、そんな気分を邪魔するかのごとく入り口から不死身の鎧軍団が入ってきた。

「ウゼーの来やがった……」

「ここはちーちゃんにお任せ！」

しかしその後から頭に姫様方をのせて丁寧に入り口から入ってきたちーちゃんに一部の鎧が丸飲みにされていた。飲み込んで大丈夫なのかと思っただが、ちーちゃんの胃袋で特性胃液で溶けてるらしいので復活することはないとのこと。

「フィオナちゃん！　助かったよ」

勝利の女神光臨！　と煉たちが泣いて喜ぶ。

「魔王は遺跡の魔力で何度も復活しますが、そちらは討伐隊ののりたちが何とかして切ってくれてます」

「幸助さんたちはそのまま魔王を倒しちゃってよ！」

「鎧は私たちが引き受けました」

「私だって役に立たないとね！」

フィリアが全員の補助に回り、リースが鎧の軍勢を砕いていき、リリアが魔法の呪文を唱え、フィオナがちーちゃんに指示を出していく。

「ここまでお膳立てして貰っておいたら、サボるわけにもいかんわな」

いや全くだな、と煉たちが魔王と向き合う。

「なんかリクエストある？」

「こんな時の曲ってあれしかないでしょ」

「あれだな」

「さあ、最終決戦ですよ！」



そこからは表現するのを憚るようなリンチ（ご想像にお任せします）が行われた。

「これで、終わっただろ？」

とつとつ魔王の修復も機能しなくなった。

「変化が無い？」

「鎧の方は終わりましたが……」

フィリアの報告を聞いていたときのことだ。

部屋が、遺跡が振動した。

「こ、これは!？」

「時空の歪みか!」

部屋の中央を中心として空間が歪んで行くのが目に見えてわかった。

「フィリアさんたちは早く避難して!!」

「あっ……」

「行くぞお前ら!!」

「ようじゃ…」

「やっとこさ帰れる!!」

「ゴォゴォゴォ!!」

フィリアやほかの姫が何か言いたそうにしていたが、煉たちは一瞬のチャンスも逃す訳には行かないので、気にはなつたが歪みの中で心部へと駆け出した。

そして歪みで正面が見れなくなつたぐらいだろうか、パリンと何かが割れるような音と共に、煉たち『勇者』はこの世界から姿を消した。

## 変態たちの最終話（後書き）

何とか異世界終了しました。

後はこの後エピソードを投稿するだけです。

今日中にやります。

グダグダしていましたが、後もう少しだけ宜しくお願いします。

## 変態たちのエピソード

所はアパートの一室、煉の部屋。

集まっているメンバーは部屋の主の煉に栄治、幸助に大輝の異世界に飛ばされた時のメンバー全員だ。

元の世界に戻って一週間目、今は長期の休みのまっさ中である。

そう、この世界に戻った時は、異世界に飛ばされた時から殆ど時間が経っていなかった。

魔王を倒した時の時空の歪みに巻き込まれて、次に目が冷めた時には全員が異世界に行く前に行っていた大討論会、《美少女でグッと来る設定は？》を行っていた時と同じ場所で寝ていたのだ。討論と言うよりか、自分の性癖とか趣向を暴露しているだけだったかは言っではいけないことである。

そのおかげか、一番最初に目が覚めた煉は、日付と時間を確認すると、異世界での出来事が夢だったのでは無いか、と思ってしまう。それは後に起きた栄治たちも同じ異世界に行っていた記憶もあったので、夢ではないということになった。

「さて、おまいら。ちゃんとしてきただろうな」

「あたぼっよ」

「俺なりに、けど」

「俺の文章力に期待するなよ？」

今回集まったのにはちゃんと訳がある。決してゲーム大会をするとかで集まったわけではない。

その目的とは、異世界に行って何をして何を経験したかを記録する、ということだ。

戻ってきてから三日程経った後に煉が思いつき、提案したものでそれから間を空けたのはそれぞれの考えをまとめて、メールで煉に送り、それを今日この場で統合するためだ。

「ちょ、栄治でめえ、ワードで1000KB越えとか良く書けたな  
!?!」

「はっはっは、君達とは違うのだよ！ 君達とは!!」

栄治の言いように、イラストと来た三人で制裁を<sup>ゲンコッ</sup>啜えた。

「簡潔にしとけよ。纏めんのは箇条書きでいいんだから、余計なものはいらん」

そんなこんなで進めていき、ある程度まとまったところで一息ついた。

「それにしても、姫様たちはどうしてるかねえ？」

「あれは素晴らしい女性たちだった」

「こつちに戻ってきて改めて現実を見ると、ひどいものだな」

「マジでリア充爆発すればいいのに」

一部、と言うより後半二つは妬みや僻みが関係している気がしないでもないが、世のとある男たちの現在の気持ちを表していると言えるだろう。

「まあいいじゃないか、俺たちには嫁がいるさ」

「その通りだな。現実なんてクソ喰らえ、だ」

「人それを、現実逃避と言う」

「これが後数年したら就職活動しないといけない奴等の情けない姿である」

煉と栄治が心を抉るような言葉に「そんなこと言っちゃらめええええええ」という叫びが上がり、「お前等も俺らのこと言えんだろ

うが」と突っ込まれる。

「現実なんて、現実なんてっ……………」

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……………！」

「やめろ、空しくなるだけだ」

「私の将来の夢は、自宅警備員です」

「何を言うか、それなら俺は自室警備員だぞ」

「ま、なるようにならあね」

「二次元があればそれで十分さ」

それぞれがいい感じに堕ちながら落ち着いていった。

「あーあ、空から美少女でも降ってこんかねえ」

誰かがポツリと呟いた。

その時、部屋の中に光が走った。

「うお、眩しっ」

「たかがメインカメラがやられたただけだ！」

「め、目がっ、目があああっ！」

「富竹フラッシュだとおおおお！？」

などと一つ以外懐かしいことを言っつてふざけていたのが良かったのか。

「あら？」

「え？」

「おお？」

「ふえ？」

「「「「はい？」「」「」

それぞれの上から聞こえてきた声に上を見上げると、おにゃのこがいた。当然、重力に逆らうようなことはなく、どこか見覚えのある美少女が落ちて来た。



## 変態たちのエピソード（後書き）

エピソードも終了してこの『とある世界の四人の勇し y 変態たち』略して『変態』ですが、ギリギリ2010年内に無事終わりを迎えましたー！

そういえば感想とかの方は制限があったんですね。というわけでユーズ以外の方も受け付けるようにしてみました。結果次第で変えるかもしれませんが……

心はガンダニウム合金程度の硬度しかないんやな……

2010年09月20日から始まったこの『変態』ですが、当初の予定では短編として出す予定だったので、何をトチ狂ったのかなか進まないし、前後編で出してみよっかな〜ということになり、それが遅い執筆に書きたいことも増えるというコンボが発動しずるとこんな感じの終わりを迎えました。

最初、エピソードは目が覚めて「夢だったのかな……」的なエンドを向かえる予定でした。ええ、予定でした。結果はご覧のままです。あえてあんな終わりにしました。

そういえば、この作品の中で、煉たちの姿を描写をしたことなかったのですが、これは意図的なものなのです。煉たちの姿形は決まったものがないのでご想像にお任せします、みたいな感じに。ある意味煉たちは自分みたいなもの、友人たちみたいないな感じだったのでそんな風になりました。どこのエピソードの主人公かよって所ですねw

ちなみにこの作品、完結を第一目標に書いたものです。文章とかに關しては見逃して欲しいところがいっぱいですw  
完結させるクセをつけるのが今の自分の目標ですので。

そして『変態』が終わりを迎えた時点でのPVとユニーク、お気に入りしていただいた数です。

PV 6641アクセス

ユニーク 1924人

お気に入り 6件

こう改めてみると、結構な数の人が見てくれてるんですね。中にはこんな駄文見られたもんじゃねえよ！という人もいたかもしれませんが、うれしいです。

さて、後は特に書くことはなくなってきました。

一応次回作はあります。次回作と言うより更新停止している「魔法が使えなくても」を改造したものです。

設定は元々黒歴史からのちよつとした応用ですし、そこら変のことから中二病成分が満載になる可能性がありますw

読んでやんよお！ てな貴重な方は次でもよろしくお願いします。

一応一月中にでも更新できるように目指します。

さて、2010年もこれを書いている時点では残り15分ほどです。

それでは皆様、よいお年を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8774n/>

---

とある世界の四人の勇し y 変態たち

2011年1月29日11時18分発行